

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS

No. 168 June 2023

研究の最前線

2023 年度夏期国際シンポジウム「崩壊の局面：アフロ・ユーラシアから「14 世紀の危機」を思考する」開催予告

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 2023 年度夏期国際シンポジウムが、“The Phase of Catastrophe: The Crisis of the 14th Century in Afro-Eurasian Context”のタイトルの下、7 月 13・14 日の日程で本センター内にて開催されます（一部の登壇者はオンラインでの報告となる予定）。このシンポジウムの主題は「14 世紀の危機」です。「14 世紀の危機」とは、「中世温暖期」から「小氷期」への移行期にあたる 14 世紀に起きたユーラシア規模での、1) 気候変動、2) 社会動乱、3) 疫病流行、これら 3 つの複合要素から成り、ユーラシア史を不可逆的に転換させた「危機」を意味します。

この時代の危機はこれまで、基本的にはヨーロッパ史の枠内で考えられてきました。その文脈における「14 世紀の危機」とは、まずは 1315～22 年に北西ヨーロッパの大部分を襲った飢饉による経済の後退・停滞であり、この危機を決定付けたのは 1348 年からの「黒死病」の流行です。ただし、こうした危機による人口減は、それ以前に飽和状態にあったラテンキリスト教世界の人口増を止め、人口と資源との間の均衡を回復させることで、この世界の跳躍を準備したともいわれます（加藤玄「14 世紀の危機」金澤周作監修『論点・西洋史学』ミネルヴァ書房、2020 年、116-117 頁）。しかし、この危機を長期の停滞と捉えるにせよ跳躍への準備期間と捉えるにせよ、この時代の直前には「13 世紀世界システム」と呼ばれるアフロ・ユーラシア規模での複数の経済・交易圏の連環が実現していました（ジャネット・アプー＝ルゴド；佐藤次高ほか訳『ヨーロッパ覇権以前：もうひとつの世界システム』岩波書店、2001 年）。「14 世紀の危機」の実態を明らかにするため

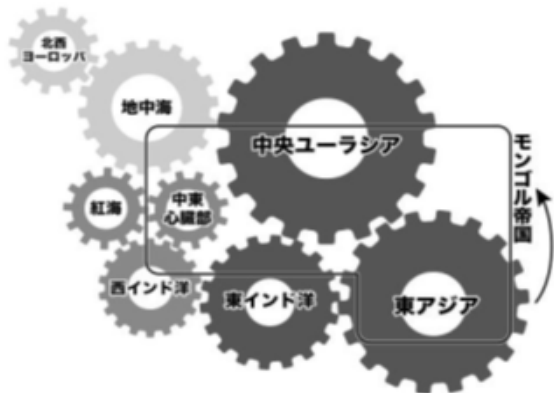


図1：アプー＝ルゴド「13 世紀世界システム」の概念図にモンゴル帝国の領域を加えたもの

に、広くアフロ・ユーラシア規模での思考が求められているのです。

環境史の側も状況は同じでした。20世紀後半以降に環境史研究が行われたのは、まずはヨーロッパ史においてでした。氷床コアや年輪を始めとする環境データを、他地域に比べれば多く残る文献データと組み合わせて気候変動の復元が進められました。その結果として主に9～13世紀が温暖、14～19世紀が寒冷であることが知られ、それらの時代はそれぞれ「中世温暖期」と「小氷期」と表現されることになりました。これら2つの時代の過渡期に表出する「14世紀の危機」は生態環境の転換期として重要視されるようになりました。

こうしたヨーロッパ史の文脈による環境史の成果は、ヨーロッパ以外の地域の歴史研究にも影響を与えますが、それは同時に重大な問題をも生み出すことになりました。その最たるものが、ヨーロッパ地域の気温変動が「世界中で共通」であるかのように受け止められたことです（中塚武「高分解能古気候データを用いた新しい歴史学研究の可能性」『日本史研究』646号, 2016年, 3-18頁）。アジア史の分野でもその影響は色濃く、生態環境を取り入れたアジア史叙述が現れてきている現状ではあるものの、それらはいずれもアジアの多言語史料の機微を細やかに汲み取る一方で、生態環境や気候変動の地域偏差やその動態に関してはやや概括的な叙述となっているきらいがあります。

逆に最新の環境データを大いに利用しながら「14世紀の危機」を描いたイングランド経済史家のブルース・キャンベルは、その著書『大遷移』において、アジア史の新知見を活かしておらず、むしろ「危機」を乗り越えた16世紀以降におけるヨーロッパの跳躍という欧米中心史観を再生産してしまっていると指摘しています（Bruce Campbell, *The Great Transition: Climate, Disease and Society in the Late-Medieval World*. Cambridge: Cambridge University Press, 2016）。このように、ヨーロッパ史の側もアジア史の側も環境史の側も、「14世紀の危機」について多分野協働による理解の刷新が求められる現状なのです。

本シンポジウムは、以上の問題意識の下でこの「14世紀の危機」を、西洋史・東洋史・古気候学・古遺伝学といった多分野の先端にいる研究者たちを集めて議論することを目的としています。

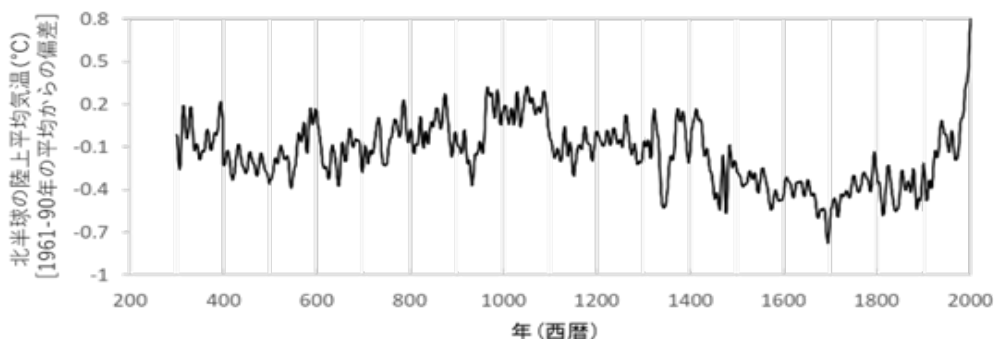


図2: さまざまな古気温プロキシ・データを統合して求められた北半球の陸上平均気温の変動
(中塚武「気候変動の周期性と世界史の新しい見方」『地球環境の世界史』ミネルヴァ書房, 掲載決定済)。

プログラムは以下の通りです。

【13 July (Thu.)】

9:30–9:45 Opening Remarks

9:45–11:45 Session 1: Reconsidering the Crisis from the West

Toshio Ohnuki (Tokyo Metropolitan University, Japan) “German Cistercian Monasteries in Transition to Instability in the 13th Century”

Ruslan Shakhmatov (SRC) “The Effects of Key Climate and Historical Events on Rus’ Principalities in 14th Century: A Comparison of Historical Records and Climate Proxies”

Johannes Preiser-Kapeller (Austrian Academy of Sciences, Austria) “Between the Adriatic and the Caspian Sea: Socio-Environmental Perspectives on the Crisis of the 14th Century from the Former Byzantine and Future Ottoman Imperial Spheres” **【Online】**

Discussant: Minoru Ozawa (Rikkyo University, Japan)

Chair: Yoko Aoshima (SRC)

13:30–15:30 Session 2: The Crisis in East Asia

Nobuhiro Uno (Hiroshima Shudo University, Japan) “Climate Anomalies and Disasters in China in the Late 13th and Early 14th Centuries”

Ishayahu Landa (University of Bonn, Germany) “The Great Chinggisid Crisis and the Question of Hunger: Preliminary Observations”

Francesca Fiaschetti (University of Vienna, Austria) “Against the Catastrophe: 14th Century Eurasian Intellectual Networks and Their Voices” **【Online】**

Discussant: Soyoung Choi (Dongguk University, South Korea)

Chair: David Wolff (SRC)

15:50–17:50 Session 3: New Methods to Calibrate the Crisis

Takeshi Nakatsuka (Nagoya University, Japan) “Multi-Decadal Climate Variability as a Key Factor to Activate Regime Shifts in Human Societies”

Yoko Nishimura (Toyo University, Japan) “Climate Change and Historical Framework: Eastern Eurasia in 9th–11th Centuries” **【Online】**

Yoichi Isahaya (SRC) & Takeshi Nakatsuka (Nagoya University, Japan) “Snowfall in Baghdad: The Mongol Empire Standing on the Threshold of the Little Ice Age”

Discussant: Adam Izdebski (Max Planck Institute of Geoanthropology, Germany) **【Online】**

Chair: Tomohiko Uyama (SRC)

【14 July (Fri.)】

13:30–15:30 Session 4: The Crisis from the Viewpoint of Connectivity

Yasuhiro Yokkaichi (Rikkyo University, Japan) “Reviewing Yuan Dynasty’s History from the Perspective of Two Cycles: The Nomadic and Maritime Worlds”

Yihao Qiu (Fudan University, China) “A Witness of Two Dynasties’ Decadence: A Case Study of Arghun Shah al-Nāṣirī’s Life and His Social Network”

Philip Slavin (University of Stirling, UK) “The Fourteenth Century Crisis and Transformation of Central Asia” 【Online】

Discussant: Wonhee Cho (Academy of Korean Studies, South Korea)

Chair: Mirlan Bektursunov (SRC)

15:50–17:50 Session 5: Crisis in Northern World from Macro and Micro Perspectives

Marie Favereau (Paris Nanterre University, France) “Mongol Resilience in Times of Crisis: How the Jochids Adapted to the Afro-Eurasian Catastrophic Environment of the 14th Century and Reshaped the Horde”

Kazuyuki Nakamura (Hakodate University, Japan) “On Cooling in the Lower Amur Basin in the 13th and 14th Century”

Nicola Di Cosmo (Institute for Advanced Study, USA) “The Crisis of 1343 on the Black Sea: Causes, Context and Consequences” 【Online】

Discussant: Konstantin Golev (Bulgarian Academy of Sciences, Bulgaria)

Chair: Norihiro Naganawa (SRC/ILCAA)

「14世紀の危機」をアフロ・ユーラシア規模でこれだけ多分野の専門家を集めて議論する場は世界的に見ても稀であり、貴重な機会となろうかと思われます。御関心の向きは、ぜひとも初夏の札幌まで足をお運びください。[諫早]

生存戦略研究全体集会と国際シンポジウム 《ウクライナとロシアの生存戦略》開催される

前号で予告しました通り、センターの生存戦略研究プラットフォームは、2023年2月20日(火)～21日(水)に、全体集会と合わせて、国際シンポジウム“Survival Strategies of Ukraine and Russia: A Year On from the Outbreak of War”を対面・オンライン併用で開催しました。

ロシアによるウクライナ侵略戦争は、独立国家とその国民、さらには人類社会の生存が、決して万全に保証されたものではないことをあらわにしました。この戦争による犠牲は極めて深刻なものです。ウクライナ国民の団結とそれに伴うさまざまな文化・社会活動、欧米諸国や日本によるウクライナ支援を含む国際関係の活性化など、新たな動きも生まれ、生存戦略研究が取り組むべき多くのテーマが現れています。

生存戦略研究プラットフォーム全体集会の企画としてはまず、グローバル冷戦史の大家オッド・アルネ・ウェスタッド教授が、19世紀における帝国統治のグローバルな変質という自身の最近の関心に基づいて中国の「再帝国化」というべき近年の状況を説明する基調講演をしました。そのあと、センターと交流協定のあるユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの研究者たちを迎えて、ソ連解体後30年の歴史学と政治学の状況を振り返り、垂直方向の権力と水平方向の人的ネットワークの複雑な関係から今後のロシア研究の可能性を模索する

ラウンドテーブルを開催しました。さらに、生存戦略研究の各部門の代表者らによるブレーストーミング・セッションを開き、今回の戦争を受けて国際政治、歴史、文化の各方面から生存戦略を研究する方法について、これまでの研究への反省や新たに考えるべき点、分野間の連携のあり方を含め議論しました。

ウクライナとロシアの生存戦略に関するシンポジウム本体は1日目の夕方から始まり、第1セッションでは、ウクライナ政治について以前から指摘されてきた、民主主義の脆弱性、財閥の影響、腐敗といった問題が戦時下でどのような状況にあり、どのような解決が考えられるかを議論しました。2日目の第2セッションではロシアの人口政策やガス輸出と戦争の関係と、貿易統計が発表されなくなった状況での推計の方法を取り上げました。第3セッションでは、2014年以来部分的な戦争状況に置かれてきたウクライナでの詩人や映画人の活動に光を当て、報告者がドンバスの荒廃に関する詩を読みながら涙で声をつまらせる場面もありました。第4セッションではウクライナにおける歴史研究の今後の方向性を、特に世界史やヨーロッパ史と関連づけながら議論しましたが、キーウからオンラインで参加した報告者の一人が空襲警報によりシェルターに避難し、緊迫した状況が伝わってきました。最後の総合討論では、これまでのロシア研究者によるウクライナ認識の浅さに関する辛口の問題提起を受けて、今後の研究の方向性を活発に議論しました。

今回の戦争は研究者の間でも意見の相違を生んでいます。このシンポジウムでは、ウクライナとロシアの状況を多方向から捉え、異なる解釈がありうることを意識しつつ建設的な議論ができました。コロナ対策のため対面参加者数を制限しながらの開催でしたが、参加人数（実数）は対面とオンラインを合わせて151名に上りました。[宇山・長縄]



戦時下のウクライナ女性詩人たちに関する報告



充実した議論を終えた参加者たち

野町素己研究員が第 25 回ケネス・E・ネイラー記念講演講師に選出



ケネス・ネイラー氏
Photo courtesy of The Ohio State
University Archives

2023年4月24日(月)、オハイオ州立大学(米国)にて、標記の講演会が行われました。ケネス・ネイラー(1937-1992)とは、オハイオ州立大学で長く教授を務めた米国の優れたスラブ語学者で、とりわけ南スラブ諸語研究で名高い専門家です。キャリア初期は、シカゴ大学での恩師エドワード・スタンキェビッチやズビグニェフ・ゴウォンプ、また当時既に名を馳せていた構造言語学のノビ・サド学派のパブレ・イビッチの影響を強く受けて形態音韻論を専門としていました。主に構造言語学的アプローチが特徴的でしたが、1960年代に米国で社会言語学が発展したのを背景に、セルビア・クロアチア語やブルガリア語を題材とした社会言語学にも取り組み、先駆的な研究成果を数多く出したことでも知られます。また、ネイラーは学会組織・運営にも熱心に関わり、1968年には Modern Language Association 会長、1969-71年には American Association for the Advancement of Slavic Studies (現 ASEES) 会長、1976年には American Association of Teachers of Slavic and East European Languages 会長を歴任するなど、1960年代～90年代の米国におけるスラブ言語学およびスラブ・ユーラシア地域研究の黄金時代の立役者の一人でもありました。余談ですが、ネイラーは学術界では当時まだ珍しかったアフリカ系アメリカ人で、早くから人種差別との闘いや有色人種の待遇改善のために尽力したことで尊敬を集めています。

本記念講演会は、故ネイラー教授の偉大な学術的功績を記念し、教授の遺族や同僚・関係者からオハイオ州立大学人文学部スラブ・東欧言語文化学科への寄付金を財源とし、毎年4月頃に世界各地から南スラブ言語学の専門家を招いて行われています。1998年に第1回が開催され、今回で第25回となります。今年はコロナ禍以降初めての完全対面イベントでした。なお、これまでの講演者はビクター・フリードマン(シカゴ大)、ロネル・アレクサンダー(UCLA)、ウェイルズ・ブラウン(コーネル大)、ズザンナ・トボリンスカ(マケドニア学士院)、イルゼ・レヒステ(オハイオ州立大)、ロバート・グリーンバーグ(ニューヘイブン大)、マーク・グリーンバーグ(カンザス大学)、アンドレイ・ソボレフ(ロシア学士院言語学研究所)など名だたる研究者ばかりです。比較的狭い専門分野とはいえ、野町研究員がネイラー記念講演会講師として招聘されたのは日本人研究者として初の快挙であり、それがSRCから出たことは実に名誉なことです。

野町氏の「アブラム・ムラゾビッチの言語観と教会スラブ語の多機能性に関わる問題」と題された講演は、ネイラー教授のセルビア語文章語形成史から着想を得て、セルビア民衆語が文章語に向かって動き出す過程で力を失っていった教会スラブ語の実態について、1774年のマリア・テレジアによる教育改革から19世紀初頭までの期間での動態を分析するものでした。野町氏が特に注目したのはハプスブルク帝国で活躍したセルビア人の官員で教育者であったアブラム・ムラゾビッチ(1756-1826)が執筆した教科書類で使用された複数の

言語形式（あるいは文体）です。野町氏は、従来の研究者が指摘してきた言語の「セルビア語化」に基づく文章語の形成の流れは概して正しいとしつつも、微視的にはその流れと逆行する傾向が一時的に存在し、その原因は当時のセルビア人エリート層における教会スラブ語の政治的・社会的位置づけが意味を持ち、さらに当時の（非効率的な）教育システムがその逆行の理由として大きかったことを実証的に論じました。

なお、野町氏はネイラー記念講演に先立って行われたベニス・カ・フォスカリ大学とオハイオ州立大学共催による「第2回南スラブ・バルカン言語学ワークショップ」にも基調講演者として招かれ、こちらでは「実現しなかったソ連言語学者によるマケドニア言語研究（1948-1950）」という題目で報告しました。さらに、記念講演後はオハイオ州立大学文書館でネイラーの学術活動に関わる資料収集に従事するなど、短いながらも充実した米国滞在になったようです。[編集部]



(左) 講演中の野町研究員、(右) 当日の司会を務めたブライアン・ジョセフ教授

2023年 JCREES スラブ・ユーラシア研究サマースクール開催予告

昨年に引き続き、JCREES の主催、センターの共催で、8月24日～25日に JCREES スラブ・ユーラシア研究サマースクールを開催いたします。これは、スラブ・ユーラシア地域の研究を志す学生を増やし、学生による同地域の学際的な研究を支援・奨励することを目的とするものです。2日間にわたって6つの講義がなされるほか、参加学生の発表が行われます。JCREES からの資金提供とセンターの百瀬宏研究奨励基金からの支援により、全国の大学の学部3～4年生、大学院修士・博士課程の院生が参加します。詳細については、近く専用サイトを開設する予定ですので、そちらをチェックしてください。[服部]

公募研究プロジェクト型セミナー「残留の比較史研究：シベリア・サハリンから台湾・東南アジアまで」の開催



「東ユーラシア研究」プロジェクト (EES-SRC) の研究協力者でありセンターの境界研究共同研究員でもある、中山大將氏 (釧路公立大学経済学部) が中心となり、スラブ・ユーラシア研究センター公募研究プロジェクト型セミナー「残留の比較史研究：シベリア・サハリンから台湾・東南アジアまで」が2023年2月17日にオンラインで開催されました。シベリア・サハリンから台湾・東南アジアまでを視野に入れた、残留現象に関するスケールのとても大きな歴史研究プロジェクトです。

中山氏の報告は「境界変動と〈残留〉：地域と時代を越えて」という題目で、残留という現象を戦争との結びつきだけではなく、境界変動という新たな観点から理解しようとするものでした。境界変動によって、

それまで国民だった人びとが国民ではなくなってしまうという、移動無き「残留」が発生するという事に注目し、地域・集団・時代ごとに分断されている研究状況を比較研究によって乗り越えようとしています。もう一人の報告者は、残留日本兵の問題を研究されている林英一氏 (二松学舎大学文学部) で、「映像にみる残留日本兵の実態と表象」という報告を行い、残留兵士がいかに関心を持続してきたのか、彼らの「表象」と「実像」のせめぎあいを論じました。報告に対して、二人の討論者、岩下明裕氏 (SRC)、山口博史氏 (徳島大学大学院社会産業理工学研究部) からは、「残留」という概念に関するコメントが相次ぎました。中山氏のリプライにあったように、今後の比較研究の進展のなかで、「残留」に代わる、より包括的な用語によって、東ユーラシアの境界変動地域に生きる／生きた人びとの姿が捉え直されることが期待されます。

なお、このセミナーの様子は、下記 URL から YouTube 動画として視聴することができます。

[井上]

<https://youtu.be/tMT-7NAC0T4?list=PLVHkqEF-oYRY7TvFpqlXdlUK11VZvPdHa>

共同研究員

2023年度からセンター共同研究員になっていただく方々は以下の通りです (各カテゴリーの中では五十音順)。2022年度から2年任期の共同研究員については、センターニューズ第165号をご参照ください。[編集部]

共同研究員（一般）

任期：2023年4月1日～2025年3月31日（2年間）

秋山徹（北海道教育大釧路校）、油本真理（法政大）、阿部賢一（東京大）、池田嘉郎（東京大）、岩崎一郎（一橋大）、岩本和久（札幌大）、上垣彰（西南学院大）、植田暁（日本貿易振興機構アジア経済研究所）、海野典子（早稲田大）、大串敦（慶應義塾大）、大野成樹（旭川市立大）、小川佐和子（北大文学研究院）、小椋彩（北大文学研究院）、小澤実（立教大）、貝澤哉（早稲田大）、加藤有子（名古屋外国語大）、加藤博文（北大アイヌ・先住民研究センター）、加藤美保子（広島市立大）、梶さやか（岩手大）、金山浩司（九州大）、神竹喜重子（東京藝術大）、亀山郁夫（名古屋外国語大）、河村彩（東京工業大）、北井聡子（大阪大）、木村護郎クリストフ（上智大）、久保慶一（早稲田大）、小松久男（東洋文庫）、小森宏美（早稲田大）、金野雄五（北星学園大）、左近幸村（九州大）、佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館）、佐藤圭史（北海道医療大）、佐原徹哉（明治大）、塩川伸明（東京大）、塩谷哲史（筑波大）、重松尚（日本学術振興会）、篠原琢（東京外国語大）、下里俊行（上越教育大）、白岩孝行（北大低温科学研究所）、杉浦秀一（北大）、醍醐龍馬（小樽商科大）、高尾千津子（元東京医科歯科大）、高倉浩樹（東北大学）、高橋沙奈美（九州大）、高橋美野梨（北海学園大）、巽由樹子（東京外国語大）、田畑朋子、地田徹朗（名古屋外国語大）、月村太郎（同志社大）、鶴見太郎（東京大）、徳永昌弘（関西大）、鳥飼将雅（大阪大）、鳥山祐介（東京大）、中井遼（北九州市立大）、中澤敦夫（富山大）、中田瑞穂（明治学院大）、中地美枝（北星学園大）、中村唯史（京都大）、長與進（早稲田大）、沼野充義（名古屋外国語大）、野田仁（東京外国語大）、野中進（埼玉大）、野部公一（専修大）、乗松亨平（東京大）、濱本真実（大阪市立大）、林忠行（京都女子大）、番場俊（新潟大）、平田武（東北大）、平松潤奈（金沢大）、廣瀬陽子（慶應義塾大）、樋渡雅人（北大経済学研究院）、福嶋千穂（東京外国語大）、福田宏（成城大）、藤澤潤（神戸大）、本田晃子（岡山大）、前田弘毅（東京都立大）、松壽英也（津田塾大）、松里公孝（東京大）、松下隆志（岩手大）、松戸清裕（北海学園大）、溝口修平（法政大）、道上真有（新潟大）、宮崎悠（成蹊大）、森下嘉之（茨城大）、八木君人（早稲田大）、湯浅剛（上智大）、横手慎二（慶應義塾大）、吉村貴之（早稲田大）

任期：2023年4月1日～2024年3月31日（1年間）

大塚夏彦（北大北極域研究センター）、金沢友緒（電気通信大）、清沢紫織（北海学園大）、後藤正憲（農林水産政策研究所）、ゴルシコフ・ビクトル（新潟県立大）、齊藤久美子（和歌山大）、佐藤嘉寿子（帝京大学短期大）、鈴木理奈（札幌医科大）、松本かおり（神戸国際大）、村知稔三（青山学院大）、山川卓（北海道教育大函館校）、山田良介（九州国際大）、山脇大（野村アセットマネジメント株式会社）

地域比較共同研究員

任期：2023年4月1日～2025年3月31日（2年間）

伊藤融（防衛大）、小沼孝博（東北学院大）、川島真（東京大）、草野大希（埼玉大）、澤江史子（上智大）、田村容子（北大文学研究院）、山根聡（大阪大）、吉田修（広島大）

任期：2023年4月1日～2024年3月31日（1年間）

秋田茂（大阪大）

境界研究共同研究員

任期：2023年4月1日～2025年3月31日（2年間）

安溪貴子（山口県立大）、池炫周直美（北大公共政策大学院）、石井明（東京大）、伊豆芳人（ボーダーツーリズム推進協議会）、今井宏平（日本貿易振興機構アジア経済研究所）、今野泰三（中京大）、小川玲子（千葉大）、郝洪芳（ミシガン大）、北川眞也（三重大）、北村嘉恵（北大教育学研究院）、金成浩（琉球大）、小池康仁（与那国フォーラム）、樽本英樹（早稲田大）、中居良文（学習院大）、中山大将（釧路公立大）、ブル・ジョナサン・エドワード（北大メディア・コミュニケーション研究院）、前田幸男（創価大）、益尾知佐子（九州大）、舛田佳弘（北海商科大）、山崎幸治（北大アイヌ・先住民研究センター）

任期：2023年4月1日～2024年3月31日（1年間）

田村将人（国立アイヌ民族博物館）

専任研究員・助教・非常勤研究員セミナー

ニュース前号以降、専任研究員セミナー等が以下のように開催されました。

2023年2月2日 井上岳彦

報告：ロシア帝国仏教徒の世界旅行（19世紀末～20世紀初）

コメンテータ：石濱裕美子（早稲田大学教育・総合科学学術院）

このペーパーは外国に旅した仏教徒とロシア国家の関係を主題とし、前半は、カルムイク人のモンゴルとチベットの聖地への巡礼の困難な様子を、帝立ロシア地理学協会文書室に残された旅行記をもとに記述しています。後半は、ブリヤート人の仏教団長の南アジア・東南アジア旅行を、公刊済みの外交史料をもとに描き、セイロンではロシアの外交官が彼の関心をイギリス植民地行政の欠陥と現地住民の抑圧状態に向けさせ、シヤムでは彼がロシア大使と共に国王に謁見し両国の関係強化に貢献したことを述べています。コメンテータからは、ダライ・ラマとブリヤート人の関係や、ヨーロッパでの仏教の流行など、ペーパーに書かれていること背景についての豊富な知識が提供されました。出席者からは、メッカ巡礼との比較の観点からのコメント、各国の仏教界の間の関係についての質問、地理学協会と仏教徒の関わりやロシア帝国政府の意図をより深く究明することへの期待などが出されました。[宇山]

2月7日 ウルフ、ディビッド

報告：Amurtsy and Zaamurtsy in the Russian Civil War: New Documents from Harbin

コメンテータ：中嶋毅（東京都立大学人文社会学部）

ノヴォシビルスク州国立文書館に収められている、1917年から22年にかけての満洲に関係する6つの文書の解題として書かれたペーパーで、食糧問題と国際関係、民族間関係を重ね合わせた解説になっています。文書そのものも付されており、そこからは、ロシアにとって経済的・軍事的に重要であった満洲でロシアのさまざまな勢力やチュルク・タタール人、ウクライナ人の民族組織が活動し、日米や中国の諸勢力の思惑も交錯していた様子が浮かび上がります。コメンテータは、各文書の内容について、中東鉄道や労働運動、極東共和

国の問題に重点を置きながら解説・質問しました。出席者からは、1917年以前と以後の人的連続性、1917～22年という特殊な時期の地政治のあり方、当時の日露関係の多面性などについて質問・コメントが出されました。報告者のリプライでは、北東アジアが豊かだが争いの多い地域になっていったことが、ハルビンから見るとよく分かるという言葉が印象的でした。[宇山]

2月13日 ベクトウルスノフ、ミルラン

報告：Soviet Kyrgyzstan in the 1920s: the anti-manap campaigns during the NEP era

コメンテータ：Isabelle Ohayon (Centre for Russian, Caucasian and Central European Studies, EHESS/CNRS)

報告者が昨年提出した博士論文の一部を発展させたペーパーです。1920年代のクルグズスタン（キルギス）において、マナプ（部族首領）らが共和国中央および地方のエリートと結びついて隠然たる権力を維持し、ソヴィエト政権もマナプを排除しようとしながらかえって地方の権力関係に巻き込まれていった様子を、郷ソヴィエト選挙などを例に描いています。同時に、マナプ追放政策が相当強硬なものだったことも指摘されています。コメンテータは、報告者の研究が従来の1920年代中央アジア政治史研究よりもはるかに興味深い細部を明らかにし、特に共和国中央と地方の政治状況のつながりを描き出したことを評価しました。また、帝政期とソ連期の連続性と違いについて質問しました。出席者からは、ソヴィエト政権のマナプへの依存と追放の関係、地方有力者のロシア語能力などについて質問がありました。[宇山]

2月24日 諫早庸一

報告：バグダードに雪が降る：「小氷期」の戸口に立つモンゴル帝国（1206～1368年）

コメンテータ：宇野伸浩（広島修道大学国際コミュニティ学部）

このペーパーは名古屋大学の中塚武氏との共著論文で、中世温暖期から小氷期への気候の転換がモンゴル帝国フレグ・ウルスの政治に影響を与えたのか否かを問うたものです。「自然のアーカイヴ」である年輪データと「社会のアーカイヴ」であるアラビア語年代記を照らし合わせるスリリングな作業による研究で、特にアラビア語年代記の中から、先行研究で見落とされていたイラクの大雪・冷害に関する記述を見つけ出してくる手際は鮮やかでした。コメンテータからは、気温だけではなく降水量に注目して両者の相関・逆相関を見る必要性など、データと分析法についてきめ細かな指摘がありました。出席者からは、年輪データが取れるアルプスの夏の気温とバグダードの冬の気温の相関の程度や、冷害とフレグ・ウルスの後継者争いやバグダード派財務官僚の興亡との関係を実証する方法などについて質問が出ました。報告者の応答からは、環境史と政治史の接合にまだまだ課題があることが分かると同時に、気候の短期的・中期的・長期的変動がそれぞれ人間社会に与える影響の違いに着目することによって、歴史の見方がより豊かになっていく可能性が見えてきました。[宇山]

2月28日 青島陽子

報告：帝国支配の歴史

コメンテータ：福嶋千穂（東京外国語大学大学院総合国際学研究院）

朝日カルチャーセンターの講座「ウクライナの歴史」で報告者が担当した講演をもとに出版される予定のペーパーです。ヨーロッパ東部における「長い 19 世紀」は、分割されたポーランド・リトアニアの犠牲の上でロシア、ハプスブルク、プロイセン（ドイツ）の 3 帝国が均衡を保った時代だという認識を前提に、ロシアとハプスブルクがポーランド系エリート・住民の影響を抑えるためにそれぞれ異なる対ウクライナ人政策を取る中で、両国内のウクライナ主義運動が、帝国の意図を超えて互いに影響しながら発展した様子が描かれています。ロシア帝国領ウクライナでかなり強い力を持った「ロシア」ナショナリズムが、ドニプロ地域主義の伝統を一つの底流としていたことも指摘されています。コメンテータは、ここまでポーランドの動向に目を配ったウクライナ史の解説はなかなかないと評価したうえで、ロシアとハプスブルクの類似性と相違を改めて整理しました。出席者からは、帝国の統治を合理主義的に捉えてよいかという問題から、20 世紀初めのウクライナの穀物輸出力に至るまで、多様な質問・コメントが出ました。[宇山]

3 月 1 日 後藤正憲

報告：サハにおける農地の名前

コメンテータ：江畑冬生（新潟大学人文学部）

ここで言う農地は、タイガの中にできた草地で、サハ人が牛馬牧畜の飼料生産に活用している「アラス」を指します。本ペーパーは、アラスへの命名を「自然の中に人間の場所を構築する行為」と捉えて、ある地区の土地台帳から農地の名称を拾い上げ、意味による分類を試みています。また、近年は農村からの若者の流出や温暖化傾向によって農地が縮小し、アラスが名前を失い忘却される可能性が高まっていることを指摘しています。コメンテータは、アラスの名前からサハ人の生業や自然観が窺える内容で、環境学、宗教学、口承文学など隣接分野への波及効果も期待できると評価したうえで、名前についての言語学的な説明を行い、土地台帳上の表記のために解釈が難しい名前の意味を明らかにする方法を示唆しました。出席者からは、名付けという行為と所有の関係、名前の共有・継承のされ方や、土地制度などに関する質問が出されました。[宇山]

3 月 16 日 清沢紫織

報告：戦間期におけるロシア語およびウクライナ語のラテン文字化をめぐる

コメンテータ：貞包和寛（日本学術振興会特別研究員 PD）

このペーパーは、オーストリア・ハンガリー帝国時代のガリツィアにおけるウクライナ語の文字に関する論争などの前史や、ソ連時代初期のテュルク諸語のラテン文字化に触れたうえで、1920 年代から 1930 年頃にかけて行われたロシア語とウクライナ語のラテン文字化に関する議論を紹介するものです。ロシア語についてはラテン文字が革命的・反宗教的・国際的な文字であるという主張がなされたこと、ウクライナ語については統一された世界言語の確立というマル主義的な考え方の影響が見られたことを指摘しています。コメンテータは、社会言語学における文字の問題の重要性を述べたうえで、ロシアとウクライナにおけるラテン文字化の議論の量的な差や、両者の相互影響について質問しました。出席者からは、エスペラント運動との関係や共産党中央の立場など、多様な論点についての質問がありました。[宇山]

3月29日 村上智見

報告：ソグディアナの紡織技術：カフィル・カラ遺跡出土炭化染織品を対象として

コメンテータ：宇野隆夫（国際日本文化研究センター名誉教授）

このペーパーは、ユーラシア各地に「ソグド錦」と呼ばれる染織品が多数存在しながら、実際にソグディアナで製作されたものか否かが明らかでない一方、ソグディアナ自体で染織品が出土することは稀であるという状況の中で、ウズベキスタンのカフィル・カラ遺跡で8世紀初頭の火災によって炭化して奇跡的に今日まで残存している染織品の技法と材質を調査・分類したものです。その結果、同時代の他地域でも確認された例のない、高度な技法を用いた棉織物が生産されていたことが判明するという、染織技術史上の発見がなされています。コメンテータからは、研究史に関する詳細な補足や、織物の分類についてのコメント、研究戦略上の提案がなされました。出席者は、美術史など他分野の研究との連携可能性や、カフィル・カラを離宮としていたとされる「サマルカンド王」の統治のあり方と出土資料の関係などについて、コメント・質問をしました。[宇山]

3月31日 安達大輔

報告：The First Japanese Translation of Tolstoy's The Kreutzer Sonata: From the History of Melodramatizing Adaptation of Russian Classical Text in Modernizing Japan

コメンテータ：望月哲男（北海道大学名誉教授）

本ペーパーは、近代日本文学の成立にあたり、坪内逍遙らが江戸時代の戯作に見られる勧善懲悪的・図式的で「メロドラマ的」な伝統から脱し、外国文学の翻訳・模倣を通して写実主義的な文学を作り出そうとしたものの、実際の変化は一直線には進まなかった例として、トルストイ作『クロイツェル・ソナタ』の最初の日本語訳を取り上げています。この翻訳は、原作では複合的な原因によるものとして描かれている妻の殺害を、単に妻が家族のモラルを犯したことによるものとして善悪二元論的・家父長主義的に説明しており、報告者は、日本ではロシア文学の受容においてメロドラマ的想像力がリサイクルされたと述べています。コメンテータは、メロドラマ概念を整理する必要性や、明治期の文学・文化理念のベクトルの多層性など、多角的な観点からコメントしました。出席者からも、日本におけるロシア文学受容の歴史的背景、翻訳の仕方に対する読者からの影響、江戸時代の倫理と明治時代の倫理の連続性と変化などについて多くの質問が出ました。センターでは普段話題になることが少ない、教員・研究員の文学や日本文化への関心を互いに知る機会になったという意味でも、興味深いセミナーでした。[宇山]

研究会活動

センターニュース 167号以降、センターが主催・共催した諸研究会活動は以下の通りです（国際シンポジウムを除く）。[編集部]

2月2日 北海道中央ユーラシア研究会第143回例会 和田大知（早稲田大学大学院）「英露協商後のチベット・ロシア関係—ダライラマとロシア領内チベット仏教徒の交流に注目して—」

2月6日 生存戦略&実社会共創研究セミナー・HIECC 第11回北海道で考える北東アジア国際情勢シンポジウム 濱田武士（北海学園大学）、原口聖二（北海道機船漁業協同組合連合会）「日ロ漁業協定セミナー～ウクライナ戦争下における交渉のゆくえ～」

2月10日 SRC セミナー Мария Данилевская “Писатели и их литературная среда в русской литературе XIX века: Н.А. Некрасов и его современники” [マリヤ・ダニレフスカヤ（ロシア文学研究者）「19世紀ロシアにおける作家と文壇：Н.А. ネクラースフと同時代人」]

2月14日 北海道スラブ研究会 古宮路子（東京大学）「ソ連知識人オレーシャの苦悩：ヴォロージャ像をめぐる（『オレーシャ』『羨望』草稿研究：人物造形の軌跡』より）」

2月16日 International Scientific Research Workshop “The Comparative Research on Slavic-Eurasian and Asian Multinationals and the Analysis of Structural Changes in the International Division of Labor” (Project-Based Collaborative Research (Fiscal Year 2022) of the Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University, Japan) Takuma Kobayashi (Matsuyama University) “Overseas Expansion of Chinese Manufacturing Companies: From the Perspective of GVC”; Yumiko Nakahara (Kyushu Sangyo University) “Foreign Direct Investment and Multinationals from Taiwan: Recent Trends and Cases”; Victor Gorshkov (University of Niigata Prefecture) “Economic Sanctions and Structural Changes in the Internationalization Strategies of Russian Financial Multinationals”; Agnieszka McCaleb (Warsaw School of Economics) “Strategies of Polish Multinationals in Times of Disruption”

2月17日 公募研究プロジェクト型セミナー 中山大将（釧路公立大学）「境界変動と＜残留＞：地域と時代を越えて」、林英一（二松学舎大学）「映像にみる残留日本兵の実像と表象」

2月19日 特別セミナー 「ウクライナの集合的記憶におけるバビ・ヤール」 Amelia Glaser (University of California San Diego) “‘Mine from ’33, yours from ’41’: Poetic Reinventions in Contemporary Ukraine”; Yuliya Ilchuk (Stanford University) “‘Document’ versus ‘Context’: Anatoly Kuznetsov and Sergei Loznitsa on the Tragedy of Babyn Yar”

2月24日 ウクライナ文化に関する特別セミナー 「マイダン革命以降におけるウクライナ文化の展開」 Amelia M. Glaser (University of California San Diego) “Reimagining Community: Volodymyr Zelensky and Ukraine’s Civic Turn”; Mitsuharu Akao (National Museum of Ethnology, Japan) “Ukrainian Hip-Hop and Folk Culture in the war with Russia”; Yuliya Ilchuk (Stanford University) “Narrating Refugee Experience during the War in Ukraine”

2月24日 特別セミナー Ana Hedberg Olenina (Arizona State University) “Movement as Spatialized Thought: Biomechanics and Ecological Cognition in Early Soviet Culture”

2月27日 公募研究共同研究班セミナー 「サハリン・北海道・九州・韓国（朝鮮半島）を

つなぐダークツーリズム」山田良介（九州国際大学）「周辺／境界地域から考える日本の近代－北海道と北部九州－」、木村貴（福岡女子大学）「司法が語る朝鮮人『徴用工』問題－周辺／境界の人々の尊厳回復の歩み」、花松泰倫（九州国際大学）「周辺／境界地域の歴史とダークツーリズム」

2月28日 共同研究班「国家の生存戦略に関する共同研究」報告会 秋山徹（北海道教育大学釧路校）「山岳遊牧民の生存戦略：クルグズ近現代史を事例に」、吉村貴之（早稲田大学）「現代アルメニアの漂流する政治」

3月2日 EES/UBRJ 生存戦略 & 実社会共創研究セミナー 富田敬大（神戸大学）「越境する家畜、越境しない牧地利用：社会主義モンゴルの牧畜開発と自然災害」

3月3日 第44回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 「田畑伸一郎教授最終講義」田畑伸一郎（SRC）「ポスト・プーチンのロシア：経済をどう立て直すか？」

3月4日 公募研究プロジェクト型オンライン・セミナー ラウンドテーブル「国際河川を巡る国際関係」山田哲也（南山大学）「問題の所在」、地田徹朗（名古屋外国大学）「アラル海問題と日本」、大八木英夫（南山大学）「水文学からみた国際河川」、籠橋一輝（南山大学）「環境経済学からみた国際河川」、星野昌裕（南山大学）「中越国境と河川」

3月4日 北海道ポーランド文化協会<<特別講演>> 佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館）「プロニスワフ・ピウスツキが集めたアイヌの衣類」、田村将人（国立アイヌ民族博物館）「ピウスツキが来たこと、その後の樺太アイヌの歩み」

3月6日 北海道中央ユーラシア研究会第144回例会 三栖大明（北海道大学大学院）「ソ連人類学の歴史とL. N. グミリョフ『エトノス理論』の展望」

3月14日 セミナー「ロシア・ソ連映画のなかの住宅」 本田晃子（岡山大学）「ロシアは誰に住みよいか：19世紀末から21世紀初頭までのロシア住宅史概観」、小川佐和子（北海道大学）「帝政期映画における家と劇場」、オクサーナ・ブルガーコワ（マインツ大学）“Сколько квадратных метров нужно для счастья: аффекты в кухонных интерьерах советских и постсоветских фильмах” [幸福には何平方メートルが必要か：ソ連・ポストソ連映画におけるキッチン内の情動]、映画『スチリャーギ Стиляги』（ワレーリー・トドロフスキー監督、2008年）

3月17日 Workshop “Some Aspects of Melodramatic Adaptation in Russian and Japanese Cultural Encounters” Oksana Bulgakowa (Johannes Gutenberg University, Mainz) “Melodramatic Things and Bodies of Memory in the Soviet Japanese Stories about Individual Loss and Collective Traumas”; Daisuke Adachi (SRC) “The First Japanese Translation of Tolstoy’s The Kreutzer Sonata: From the History of Melodramatizing Adaptation of Russian Classical Text in Modernizing Japan”

3月20日 「権威主義とポピュリズム」科学研究会 Lee Morgenbesser (Griffith University) “The Rise of Imitation Election Observers”

3月20日 EES/UBRJ 生存戦略 & 実社会共創研究セミナー 志宝ありむとふて（東北大学東北アジア研究センター）「周縁文化の独自性と文化変容の理論研究—東アジアとイスラーム文明圏間の関係及びその学際的研究をめぐって—」

3月20日 生存戦略研究セミナー 「草原とオアシスの文化交流—出土資料から「周縁」が果たした役割を探る—」 オドフー・アンガラグスレン（世界遺産オルホン渓谷文化遺産事務所）「テュルクの唐様式墓出土品とモンゴル高原の文化交流」、ベグマトフ・アリシエル（ニューヨーク大学古代世界研究所）「中央アジア オアシス都市と新出考古資料から見る東西文化交流」

3月21日 カンファレンス 「ソヴィエト・アヴァンギャルドと音響文化」 Валерий Золотухин (Ruhr-Universität Bochum) “Литературные звукозаписи 1920-х годов и техники их слушания” [ヴァレリー・ゾロトゥヒン（ルール大学）「1920年代の文学関係の録音とその聴取の技術」]、Оксана Булгакова (Университет Гутенберга в Майнце) “Футуристы и гомогенизаторы, или голос, музыка и шум в ранних советских звуковых фильмах” [オクサーナ・ブルガーコワ（マインツ大学）「未来派とホモジナイザー、あるいは、初期ソヴィエトのサウンド映画における声、音楽、ノイズ」]

3月23日 生存戦略研究セミナー 「草原とオアシスの文化遺産—地域の遺産をいかに守り活用するか—」 オドフー・アンガラグスレン（世界遺産オルホン渓谷文化遺産事務所）「モンゴルにおける遺跡の保存と世界遺産地区の整備」、ベグマトフ・アリシエル（ニューヨーク大学古代世界研究所）「ウズベキスタンにおける文化遺産の調査研究」

3月26日 サハリン樺太史研究会第65回例会 「池田善長樺太調査報告書と工藤信彦『樺太覚書』」 竹野学（北海商科大学）「池田善長（著）『秘 昭和十八年度 樺太ニ於ケル農業技術水準並ニ其ノ発展ニ関スル調査報告書』について」、中山大将（釧路公立大学）「工藤信彦『樺太覚書』の概要と意義」

3月27日 SRC 特別セミナー 松澤祐介（西武文理大学）「EU加盟20年目のスロバキア経済」

4月21・24・25日 生存戦略研究セミナー 「Nona Shahnazarian 氏連続講演」 ノナ・シャフナザリヤン（アルメニア科学アカデミー考古学民族学研究所）““Восточницы” и политика коренизации: re-композиции гендерных режимов в СССР” [Oriental Women and Affirmative Action Empire: Re-composition of Gender Configuration in the USSR]; “Армяно-говорящие мусульмане Краснодарского края (Россия) и Кыргызстана: идентичность, политика и фронтир” [Armenian-Speaking Muslims of Krasnodar Region (Russia) and Kyrgyzstan: Identity, Politics, and Frontier]; “Подвижные границы: ментальные карты утраченных поселений (на материале Гадрута и Шуши, после второй карабахской войны 2020 г.)” [Moving Borders: Mental Mapping of

Lost Cities (Hadrut and Shushi, 2020)]

4月30日 Workshop “Cultural, Linguistic, and Confessional Diversity in the Caucasus: Historical and Daily Experiences” Nona Shahnazarian (Institute of Archaeology and Ethnography, Armenia) “Franks/Frankgs (Armenian Catholics) of Georgian Trans-border: Biographical Approach to Migrant Communities”; Alex MacFarlane (Tokyo Metropolitan University) “Outside Print Nationalism: Copying the City of Brass in the 19th-century Caucasus”; Yorika Tsutsumi (University of Tokyo) “Alternative Form of Patriotism in Azerbaijan: Homeland, Truth, and Sincerity in Akram Aylisli's Stone Dreams”

5月14日 UBRJ / EES 実社会のための共創研究セミナー・名古屋外国語大学 RINGS セミナー 「大学教育における地域連携の実践と関係人口」 田中輝美（島根県立大学）、地田徹朗（名古屋外国語大学）、池炫周直美（北海道大学）、石田聖（長崎県立大学）、花松泰倫（九州国際大学）

人事の動き

田畑伸一郎教授の退職と最終講義

3月3日金曜日の夕刻に、40年近くセンターに勤務された田畑先生の最終講義が、第44回公開講演会として行われました。最終講義は、研究者としての履歴を語るものもありえたのですが、田畑先生たってのご希望で「ポスト・プーチンのロシア：経済をどう立て直すか？」という暗く厳しくも未来志向の講義になりました。そこには、田畑先生がこれまで取り組まれてきたテーマが集約されており、その視座から暗雲立ち込める未来を明快に展望できる内容になっていました。現在、ロシアの石油・ガス輸出は大幅に減少し、対西側諸国輸出は限りなくゼロになっている。輸入代替は2014年以来、農業で進み、ロシアは穀物の純輸出国に転じたものの、それ以外では西側諸国との技術格差・生活水準格差が拡大している。その背景には、石油・ガスの生産・輸出に依存してきた経済があり、為替レートの上昇によって国外で競争力のある製造業を育てられなかったオランダ病がある。ロシア経済が立ち直るには外国からの直接投資が不可欠であり、西側との協調を生み出せるか否かが鍵となる。そのためにもロシアは、愚かしい戦争を一日も早くやめて、国外に出た若者が帰ってくる国にならなければならない。普段は感情的な言葉を使わない田畑先生のこの結論はとても重く響きました。

最終講義は、人文・社会科学総合教育研究棟W203号室とウェビナーで開催され、対面で80名、オンラインで100名を超え



講演後に花束を受け取る田畑教授

る出席がありました。講演の最後には、われわれのセンターからだけでなく、田畑先生と共同研究の縁の深い北極域研究センターからも花束贈呈が行われました。[岩下]

後藤助教の退職



誕生日祝いを受け取る後藤氏

2023年3月末日で後藤正憲氏が退職されました。後藤氏は2003年10月にセンターCOE 研究員として着任され、その後ロシアでの研究滞在期間を挟みますが、センターで学術研究員、博士研究員、助教として長年にわたって勤務されました。ご専門は文化人類学で、とりわけチュヴァシの伝統文化、民間医療、宗教的信仰、口承文芸や記憶の形成などの分析で業績を上げておられます。2015年からは北極域研究推進プロジェクトに参加され、サハ（ヤクート）の牧畜や自然認識にかかわる研究に従事されていました。なお、後藤氏は文学への造詣も深く、任期中にはチュヴァシ人作家エヴァ・リーシナの『シュニヤル村の子供たち』（2018年、群像社）と『エヴァ・リーシナ作品集』（2022年、未知谷）の翻訳も出版されました。

センターは学際的研究を標榜していますが、その実践は簡単ではありません。しかし後藤氏は専門外のさまざまな研究会に出席し、鋭い発言を数多くされるなど、まさにセンターの学際性を積極的に体現していたように思われました。また、大学院の授業も積極的に出席し、学生の発表のコメントータも数多く務められました。大変博学で、さらに非常に穏やかな性格の持ち主で、院生や若手研究者から見ると実に頼れる先輩であったと思います。ただ研究に対し真摯なあまり、稀に想定外の毒舌を振るうことも、後藤氏の魅力の一つと個人的には思っています。

2023年4月からは農林水産政策研究所で研究活動を継続されています。後藤氏の転出はセンターにとって大きな痛手ではありますが、後藤氏にはこれまでのご協力に感謝すると同時に、新天地で更なる活躍をお祈りいたします。[野町]

大西富士夫准教授の兼務教員としての着任

2023年4月1日付で、北海道大学北極域研究センターの大西富士夫准教授が、スラブ・ユーラシア研究センターでの兼務を開始されました。大西氏は北極域の国際政治について多くの業績をお持ちで、ArCS II（北極域研究加速プロジェクト）の重要メンバーでもあり、田畑伸一郎教授の退職後のセンターが引き続き北極域研究と関わっていくための架け橋の役割を果たしていただくこととなります。センターでは、セミナーの開催や公開講演、大学院の授業など、研究・教育活動に広く携わっていただく予定です。[編集部]

URA の着任

センターの研究活動の更なる拡充と環境整備を目指し、2022年冬にセンターでは初めての部局所属 URA の公募を行いました。URA とは University Research Administrator の略で、研究活性化のためのサポートとマネジメントを担当する方のことです。センターでは特に広報、編集・出版、外国人研究者のサポートを担当されますが、これ以外にも事務と連携して多岐にわたる活動が期待されています。

日本全国から数多くの応募があり、外国人の応募が複数みられるなど、大学の国際化がますます感じられる公募となりました。厳正な審査の結果、田宮彩也香氏が採用されました。

田宮氏は北海道大学法学部のご出身で、博士前期課程は神戸大学大学院国際協力研究科に進学され、同研究科より法学修士号を取得されました。これまでは大学改革支援・学位授与機構および北海道教育大学事務局で、さまざまな実務経験を積んでこられました。田宮氏ご自身も URA 職として着任するのは初めてですが、着任してまだ間もないものの既に職務の多くを着々とこなしておられ、一同大変心強く感じています。[野町]



URA 田宮氏 (左) と野町センター長 (右)

研究員・事務職員の異動

ANTONENKO, Viktoriia 学術研究員 2023年1月31日(退職)

大間知 亜紀 事務補佐員 2023年2月28日(退職)

田畑 伸一郎 教授 2023年3月31日(退職)

後藤 正憲 特任助教 2023年3月31日(退職)

清沢 紫織 非常勤研究員 2023年3月31日(退職)

末森 晴賀 学術研究員 2023年3月31日(退職)

坂口 夏海 事務補佐員 2023年3月31日(退職)

児島 和子 事務補助員 2023年3月31日(退職)

石戸谷 護 事務補助員 2023年3月31日(退職)

大西 富士夫 准教授 2023年4月1日(兼務)

田宮 彩也香 U R A 2023年4月1日(採用)

藤本 健太郎 非常勤研究員 2023年4月1日(採用)

山本 大悟 事務補佐員 2023年4月1日(採用)

松本 莉奈 事務補助員 2023年4月1日(採用)
坂口 夏海 事務補助員 2023年4月24日(採用)

2023年度の客員教授・准教授

公募していました2023年度客員教授・准教授は審査の結果、次の6名の方々にお願いすることになりました。[編集部]

客員教授

氏名	所属	研究テーマ
松井 康浩	九州大学大学院比較社会文化研究院	冷戦変容下のソ連異論派と西側支援者の協働：CSCE 人権レジーム形成へのインパクト
Sabine Dullin	Institut d'études politiques de Paris, Centre d'histoire de Sciences Po	Cold, Survival and Sovereignty. Yakutia-Sakha facing Soviet Collapse and Ice Melting
乗松 亨平	東京大学大学院総合文化研究科	ヴラジーミル・ヴェルナツキーの「精神圏」概念の後期ソ連における受容

客員准教授

氏名	所属	研究テーマ
高橋 沙奈美	九州大学人間環境学研究院	ロシア正教会の経済ネットワーク：メセナと社会貢献活動を中心に
Anna Kovalova	Free University (Brīvā Universitāte, Riga); European University in Saint Petersburg	Words Making Silence: Cinema of the Russian Empire and Literature
Irina Morozova	University of Regensburg	The paradox of progress. The decline of Soviet Modernity and the rise of the oil industry in Atyrau, from the 1980s – onwards

2022年夏、札幌にて

アリッサ・デブラシオ
(ディキンソン大学／センター 2022年度外国人招へい教員)

2022年の夏、私は北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの外国人招へい研究員として忘れ得ぬ2カ月間を過ごした。短期間の滞在だったが、フェローシップを得るのに2年以上かかってしまった。フェローシップ採択の通知を受け取ったのが、パンデミック流行直前の2019年12月だったからだ。その直後に起きたのは、2年間の遅延と不透明な状

況——世界中がコロナウィルスの波と戦い、国境を閉鎖していたのだから無理もない。SRCは旅行とビザの制限すべてを親切かつ迅速に教えてくれたけれど、私たちは結局ひたすら待つことしかできなかった。パンデミックが始まってから数カ月の間、旅の準備のために日本の小説と映画を鑑賞していたが、定かでない見通しと世界的な危機による苦しみから気をそらす良い手段になった。それから2年以上過ぎ、コロナウィルスの経験をシェアして永遠に変わってしまった世界に身をおいて、私と家族は札幌行きの飛行機に乗った——長いこと実現しない気がしていた旅に出るために。

札幌に着くとすぐに、私たち家族は快適で安らぐ感じを覚えた。驚くべきことに、新しい環境へ適応するに際して、13時間の時差と時差ボケ以外にさしたる困難はなかった。街は合理的に区画されていたので、すぐに馴染むことができた。札幌は徒歩でも公共交通機関でも見て回るには楽だったし、生活上必要なものもちょっと出歩けば手に入れることができた。北海道大学のキャンパスは美しく、SRCの方は、同僚として溶け込みやすく、研究にとって望ましい場所を提供してくれる。センターの設備は私の期待を超えていた——快適な研究室、よい立地、事務面での素晴らしいサポート。運よく、私の研究室の窓は大学のテニスコートに面していたので、何かを書いているときは私の好きなスポーツから出る瞑想的サウンドを聞くことができた。

SRCは、研究のための静かな空間とアクティブな国際研究協力の拠点とのあいだで、理想的なバランスを保っている。センターは金曜日に恒例のランチ・トークを主宰した。ここではコミュニティとしての一体感と、専任教員やほかの招へい研究員の仕事について学ぶ機会を与えてくれた。また、SRCは日本国外での研究活動にも強いつながりがあって、国際会議や通常の講演ではあらゆるところの研究者を北海道に集めて、そこでセンターがアイデアや対話が出会う場所として役立っている。私の北海道滞在中、SRCは東京にある慶應義塾大学、そして大阪大学で講義をする機会を整えてくれた。これらの旅は日本全国の研究仲間と貴重なコネクションを作るのに役立つ、その中には私の研究分野であるロシアの哲学および思想史に取り組んでいる人々も含まれた。私がとりわけ感謝の念を抱いているのは、大阪と東京の研究仲間と近づく機会を与えてくれた、外国人研究員プログラムの主任である安達大輔准教授と、家族のビザの手配をはじめ、事務的なサポートにおいて卓越した働きをしてくれた中嶋奏子さんである。

札幌は学術研究のための素晴らしい環境であり、また散策する場所としても同じくらい素敵だ。街は公園やお店であふれ、いくつかの美術館・博物館があり、レストランも豊富にある。私の幼い娘がここに見いだしたのは、散策と日本語会話の実践ができるスリリング



北海道の自然も楽しみました

で、親しみやすく、安全な環境だ。札幌ではほとんどどこからでも、街のすぐ近くにある山々を見ることができ、たとえ都市空間にいても自然の中にいる感じを受ける。週末になるたび、家族とともに道内の至るところをドライブした。海岸から中心部まで、北海道の景色、文化、料理のイメージを可能な限り完全につかむために。ハイライトには、支笏湖、洞爺湖、有珠山の火口のハイキング、大雪山国立公園の登山道と滝が含まれている。

私の研究を支援してくれたこと、札幌に歓迎してくれたこと、日本の研究仲間とのネットワークに繋げてくれたことについて、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターに対する感謝の念は止まない。とりわけパンデミックの困難な数年の後では。ただ一つ私が残念に思うのは滞在が短すぎたこと、しかし今回は最後の機会でないことを願っている。(2023年1月)
(英語から上村正之訳)

学界短信

学会カレンダー

2023年	6月3-4日	比較経済体制学会第63回大会 於神奈川大学 http://www.jaces.info/info.html
	6月17-18日	日本比較政治学会第26回大会 於山梨大学 https://www.jacpnet.org/convention/
	7月13-14日	スラブ・ユーラシア研究センター2023年度夏期国際シンポジウム 於SRC
	10月19-22日	Central Eurasian Studies Society (CESS) Annual Conference 2023 於ピッツバーグ大学 https://www.centraleurasia.org/conferences/annual/
	10月21-22日	日本ロシア文学会第73回全国大会 於富山大学五福キャンパス https://yaar.jp.org/?page_id=1829
	10月28-29日	ロシア史研究会2023年度大会 於九州大学伊都キャンパス https://www.roshiashi.com/annual-conference
	11月4-5日	ロシア・東欧学会2023年度研究大会 於京都大学 https://www.jarees.jp
	11月10-12日	日本国際政治学会2023年度研究大会 於福岡国際会議場 https://jair.or.jp
	11月11日	2023年度内陸アジア史学会大会 於明治大学駿河台キャンパス http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/
	11月30日-12月3日	ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Annual Convention 於フィラデルフィア (10月19-20日にsmall virtual convention) https://www.aseees.org/convention
	12月7-8日	スラブ・ユーラシア研究センター2023年度冬期国際シンポジウム 於SRC

[編集部]

大学院だより

北海道大学大学院文學院人文学専攻スラブ・ユーラシア学研究室では、修士課程に1名が入学、博士後期課程に1名が進学しました。今年度の大学院生は以下の皆さんです。また、ミルラン・ベクトウルスノフさんが9月に博士号を取得しました（論文タイトル「Building of “Nomadic Socialism”: State and Society in the Making of Soviet Kyrgyzstan」）

[青島]

2023年度スラブ・ユーラシア学講座大学院生名簿

学年	氏名	研究題目	指導教員	副指導教員	
D3	寺岡 郁夫	ウクライナの構成地域とその形成過程	岩下	宇山	服部
D3	林 健太	ピョートル1世時代の官僚出版業と国家出版言語	長縄	野町	安達
D3	中尻 恒光	ロシアにおけるマクロ経済政策（ポリシー・ミックス）に関する研究	服部	仙石	岩下
D3	上村 正之	1800-30年代ロシア文学におけるコサック表象の変遷	安達	宇山	野町
D3	長島 徹	ロシアの国籍政策	岩下	宇山	服部
D3	布日額（ブレン）	清朝末期モンゴルのナショナリズムと日露両帝国（1900-1912）	宇山	ウルフ	長縄
D3	新井 洋史	北東アジアにおける国際協力を通じた地域開発政策	服部	岩下	大西
D3	鄭 米芝	競争的権威主義と体制の安定性：プーチン政権下のロシアを中心に	宇山	仙石	岩下
D2	王 雨寒	中国と中央アジアの文化交流に関する考察	宇山	長縄	岩下
D2	松元 晶	1960年代中央アジアの自己表象	宇山	安達	長縄
D2	李 暢	日露中文化交流からみる19世紀末から20世紀中葉にかけてのハルビンのコスモポリタニズム	長縄	ウルフ	安達
D1	金 盾	中ロ両国における日系小売業の発展に関する比較研究	服部	岩下	仙石
D1	三栖 大明	戦後ソ連民族学におけるエトノス理論の展開—L.N. グミリョフを中心に—	青島	宇山	安達
M2	小太刀 雄海	19世紀末フェルガナ盆地の綿花栽培とその政治的背景：旅行記を中心に	宇山	長縄	
M2	荒濤 理沙	ヤン・コラルの汎スラヴ主義思想から見る19世紀中東欧における民族言語像	青島	ウルフ	野町

M2	根来 朝陽	帝政末期サハの民族アイデンティティ形成に対する流刑者の貢献	長縄	宇山	ウルフ
M2	山田 愛実	ポーランドにおける反ユダヤ主義	仙石	青島	
M1	井口 拓哉	スペイン内戦とロシアの対外政策	岩下	ウルフ	服部

図書室だより

オンラインデータベースの追加導入

スラブ・ユーラシア研究センターでは、主にアメリカ政府の文書を収録する、Gale 社の提供するオンラインデータベース Archives Unbound のいくつかの部編を導入していますが、本年 3 月、以下の部分を追加導入しましたので、お知らせ申し上げます。

このサービスは、北大キャンパス内から利用可能です。

- ・ロシア内戦とアメリカ：ベティ・ミラー・ウンターバーガー博士収集資料集

United States and the Russian Civil War: The Betty Miller Unterberger Collection of Documents

- ・ジョージ・H・W・ブッシュと外交問題シリーズ：ベルリンの壁崩壊とドイツ統一

George H. W. Bush and Foreign Affairs: Fall of the Berlin Wall and the Reunification of Germany

- ・東西冷戦の起源関係資料集

Origins of the Cold War

- ・米国務省情報調査局報告集：中国 1941-1947 年

Country Intelligence Reports/State Department's Bureau of Intelligence and Research Reports China (1941-1961)

<https://www.lib.hokudai.ac.jp/databases/list/?FF=9&DBID=192>

[兎内]

編集室だより

Slavic Eurasian Studies No. 35, Sugihara Chiune and the Soviet Union: New Documents, New Perspectives, ed. David Wolff, Takao Chizuko and Ilya Altman の刊行

戦前のリトアニアが独立国だった最後の年、日本の外交官・杉原千畝はカウナス赴任中、数千人ものユダヤ人の命を救うため彼らに通過査証を発給しました。その者たちの多くは、ナチスに占領されて間もない近隣国ポーランドからの難民でした。これにより、彼は日本国外で最も知られる歴史上の日本人の一人となったのです。彼はまた、戦火の東ヨーロッパから日本への唯一の経路であった東への避難、つまりシベリア鉄道を利用したソヴィエト通過

のために腐心し、ソヴィエト当局に対し、自身がビザを発行した者達にソヴィエトでも通過査証を発行してもらうよう交渉しました。

Slavic Eurasian Studies の最新巻は、当センターとモスクワの Tsentr-Fond Holocaust が共同で発行し、主にソヴィエトの 5 つのアーカイブから得られた 91 の資料を収録しています。ロシア側の資料を、ほぼ周知となっている杉原に関する日本の外務省のアーカイブ資料と並べることで、杉原がどのようにカウナスへ赴いたのか、彼が本国の松岡外相にビザ発給許可の説得をしたものの失敗した様子、そして難民たちが世界で一番長いロシアの国土を三等寝台車に揺られながら横切っていた様子、それらのチケットを国際ユダヤ慈善団体が支払っていたことなど、新たな知見が得られます。杉原個人の英雄的行為は人道団体によって補完されたものだったのです。

本書の資料部分は以下のように構成されています。

- I 杉原のハルビンと満洲国における活動
 - II 好ましからざる人物
 - III 杉原のフィンランドでの諜報活動
 - IV 杉原とユダヤ難民への通過査証の発給
 - V 改ざんされたビザ
 - VI ソ連を通過するユダヤ難民のトランジット
 - VII ケーニヒスベルクからウラジオストクへ
 - VIII 杉原と 1960 年代・1970 年代の日ソ貿易
- 付録

[ウルフ (田宮訳)]

Acta Slavica Iaponica

例年とは異なる編集作業の工程でかなり手間取りましたが、第 43 巻を無事発行することができました。論考はウェブサイトにも掲載されています。

第 44 巻も作業が遅れていますが、現在、査読結果が出揃って、筆者による修正作業が進行しています。[長縄]

『スラヴ研究』

『スラヴ研究』第 70 号は 9 本の投稿のうち、以下の力作を掲載することになりました。現在、校正作業が進行中です。

[論文]

岩崎一郎・溝端佐登史 女性の社会進出と取締役会ジェンダー多様性——新興市場諸国の実証分析——

李優大 赤のキャビア、ソ連の海——カスピ海イラン岸における漁業利権の歴史（19 世紀

前半～ 20 世紀前半) ——

岡部克哉 国家防衛評議会と対日防衛問題——軍部からみた日露戦争後の対日警戒感——
諫早庸一 ハンの巡行——ジョチ・ウルスにおける〈移動〉のポリティクス——

[研究ノート]

神原ゆうこ 「ポスト社会主義の終焉」をめぐる議論——中東欧地域の文化人類学的研究の
文脈から——

丁寧な査読をしてくださったレフェリーの皆様に心より御礼を申し上げます。残念ながら
今回の掲載が見送りとなった方も、次回以降の再挑戦をお待ちしております。次の第 71 号
の原稿締め切りは、2023 年 8 月末の予定です。センターのホームページに掲載されている投
稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください（事前申し込みは不要です）。
海外からの投稿が相当数あることなども踏まえ、第 71 号からはプリントアウト版原稿の郵
送を廃止し、PDF 版とワード版のファイルを E メールでご提出いただくことにしました。電子
ファイルの宛先は、src.slavicstudies@gmail.com になります。奮ってご応募ください！ [青島]

会議

センター協議員会

2022 年度第 12 回 3 月 8～14 日（メール会議）

議題

1. 剰余金による事業計画の策定について

2023 年度第 1 回 4 月 18 日（オンライン開催）

議題

1. 教員人事について

[事務係]

誰が何をどこで

2022 年度の専任教員、助教、日本人客員教員、非常勤研究員（五十音順）の研究成果・
研究余滴のアンケート調査を以下のようにまとめました。[編集部]

青島陽子 ① 1 学術論文 ▼帝政ロシア史研究における「帝国論的転回」：ロシア帝国西部
境界地域を中心に『史学雑誌』131(7): 60-86 (2022) ▼帝政末期ロシア（一九〇四年末—
一九一〇年）における国民教育大臣の非ロシア人政策観：西部境界地域を中心に『ロシア史
研究』108: 41-65 (2022) ② 2 その他業績（論文形式）(1) 総説・解説・評論等 ▼ウク

ライナ戦争の歴史的位相, SRC ウェブサイト (2022.4.11) <https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/PDF/20220411.pdf> (5) その他 ▼ウクライナ「記憶」を国家管理(オピニオン&フォーラム「記憶をめぐる戦争」)『朝日新聞』13版S (2022.6.7) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼帝国支配時代のウクライナ(18~20世紀初頭), 195th Asian Forum, Institute of Asian Cultural Studies, ICU 及びオンライン (2023.2.28) ▼帝政末期における境界地域の再接合: 西部境界地域の私学と初等教育における母語教育, ロシア史研究会大会, 法政大学市ヶ谷キャンパス (2022.10.16) ▼ロシア帝国の近代的諸改革と西部境界地域, 2022 年度公開講座「溶解する帝国—ロシア帝国崩壊を境界地域から考える」, SRC 及びオンライン (2022.5.9)

安達大輔 ㊦1 学術論文 ▼Melodrama and War after Russia's Invasion of Ukraine, *Japanese Slavic and East European Studies* 43: 13–26, 2023 ㊦2 その他業績(論文形式)(1) 総説・解説・評論等 ▼ニコライ・カラムジン『哀れなりーザ』, ニコライ・ゴーゴリ『外套』(中村唯史、坂庭淳史、小椋彩編著『ロシア文学からの旅: 交錯する人と言葉』20–21, 30–31, ミネルヴァ書房, 2022) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼The First Japanese Translation of Tolstoy's *The Kreutzer Sonata*: From the History of Melodramatizing Adaptation of Russian Classical Text in Modernizing Japan, Workshop “Some Aspects of Melodramatic Adaptation in Russian and Japanese Cultural Encounters,” SRC and online (2023.3.17) ▼On Some Aspects of Melodramatic Reception of the 19th Century Russian Classical Texts in Japan (presentation in Russian), International conference “The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East,” University of Venice (2023.3.2) ▼スラブ・ユーラシア文化研究の再構想: メロドラマ・アーカイブ・多言語, 生存戦略研究全体集会, SRC 及びオンライン (2023.2.21) ▼Melodrama and War after Russia's Invasion of Ukraine (presentation in Japanese), ロシア・東欧学会 2022 年度研究大会(共通論題「ロシア—ウクライナ関係と世界」), 新潟大学及びオンライン (2022.11.6) ▼近代文学とナショナルな言説の関係の二面性について: ゴーゴリ文学のレッスン, 2022 年度 JCREES スラブ・ユーラシア研究サマースクール, SRC 及びオンライン (2022. 8. 26) ▼Rethinking Peter Brooks' “Melodramatic Imagination” in the Russian Context, SRC 2022 Summer International Symposium 2 “Melodrama and Melodramatic Imagination in Russia: New Perspectives,” SRC and online (2022.8.1)

諫早庸一 ㊦1 学術論文 ▼キエフとモスクワのあいだ: 前近代アフロ・ユーラシア史からの視界『現代思想』6 月臨時増刊号: 262–270 (2022) ▼Islamicate Astral Sciences in Eastern Eurasia during the Mongol-Yuan Dynasty (1271–1368) (Sonja Brentjes, ed., *Routledge Handbook on Sciences in the Islamicate World: Practices from the 8th to the 19th Century*, 687–694. London: Routledge, 2022) ▼イスラーム経由コペルニクス行き: ユダヤ教徒がつなぐ同心球天文学の道『ユリイカ』55(1): 224–232 (2023) ▼グローバルに文化を問うこと: 作図についてモンゴル帝国期東西天文学交流を例に(縄田雄二、小山憲司『グローバル文化史の試み』37–70, 中央大学出版部, 2023) ㊦2 その他業績(論文形式)(3) 書評 ▼櫻井智美、飯山知保、森田憲司、渡辺健哉『元朝の歴史: モンゴル帝国期の東ユーラシア』(勉誠出版, 2021)『北大史学』62: 48–56 (2022) (5) その他 ▼モンゴルの世界帝国(岡美穂子編『つなぐ世界史 1 古代・中世』166–169, 清水書院, 2023) ▼マルコ・ポーロと

ラシード・アッディーン（同書，188-193） ㊦5 学会報告・学術講演 ▼コメント：歴史の遠隔相関と〈奇妙な並行〉，西洋中世学会第14回大会シンポジウム「危機を前にした人間：西洋中世における環境・災害・心性」，立教大学（2022.6.19） ▼両海の覇者たち：ジョチ・ウルスにおける〈移動〉のポリティクス，第58回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会），野尻湖及びオンライン（2022.7.16） ▼Locus for Power, Locus for Intellect: Tūsī Family at the Marāgha Observatory, International Workshop “Echoes from the Medieval West Asian Cities” organized by C01-Research Group 05: Historical Research on the Urban Structure of West Asian “Islamic Cities” (MEXT Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas: “The Essence of Urban Civilization”), The University of Tokyo (2023.3.4) ▼モンゴル支配期イランにおける中国暦の導入：もうひとつの「天文対話」，人文科学研究所主催公開研究会（「東方思想の発展と交錯」チーム），中央大学及びオンライン（2023.3.17）

井上岳彦 ㊦2 その他業績（論文形式）(5) その他 ▼バルト海から来た仏教徒：カール・トゥニッソンと神智学（1911年－1916年）（吉永進一、岡本佳子、莊千慧編著『神智学とアジア：西からきた「東洋」』83-86, 青弓社, 2022） ▼内陸アジア（二）（2021年の歴史学界—回顧と展望）『史学雑誌』131(5): 272-277 (2022) ▼食の共生社会：イルクーツクを訪ねて（東北大学東北アジア研究センター編『東北アジアの自然と文化2』59-62, 東北大学出版会, 2023） ▼ロシアのチベット仏教徒（東北大学東北アジア研究センター編『東北アジアの自然と文化2』117-119, 東北大学出版会, 2023） ▼わたしのリサーチ術：さまざまな人と寝・食・動を共にする（東北大学東北アジア研究センター編『東北アジアの自然と文化2』181-184, 東北大学出版会, 2023） ㊦5 学会報告・学術講演 ▼How Imperial Powers Addressed Foreign Spiritual Authorities: The Case of the Russian Empire and the “Tibetan Buddhist World,” International Workshop “Comparative Imperial History: Eurasian and American Perspectives,” SRC and online (2022.6.22)

岩下明裕 ㊦1 学術論文 ▼(with Edward Boyle) Introduction: Geo-Politics in Northeast Asia; (with Yong-Chool Ha) Debunking the Myth of Northeast Asia; (with Edward Boyle) Conclusion: Reflecting on Regional Community in Northeast Asia (Akihiro Iwashita, Yong-Chool Ha and Edward Boyle, eds., *Geo-politics in Northeast Asia*, 1-13, 14-30, 214-226, London: Routledge, 2022) ▼国家と人びとの相克：北方領土問題を題材に（池炫周直美、エドワード・ボイル編『日本の境界：国家と人びとの相克』161-182, 北海道大学出版会, 2023） ㊦2 その他業績（論文形式）(1) 総説・解説・評論等 ▼ボーダースタディーズから読み解く国際関係（宮脇昇ほか編『国境の時代』26-45, 大学教育出版, 2022） ▼ロシアとインド：対米バランスと中央ユーラシア協商『現代インド・フォーラム』54: 3-10 (2022) (5) その他 ▼（エドワード・ボイルと）結びにかえて（池炫周直美、エドワード・ボイル編『日本の境界：国家と人びとの相克』183-188, 北海道大学出版会, 2023） ▼はしがき（伊豆芳人編『ツーリズム：未来への光芒』2, 北海道大学出版会, 2022） ▼「解放」という名の侵略『現代思想』6月臨時増刊号：103-108 (2022) ▼国際秩序を作り替えようとするロシア：「ポスト冷戦期」の終焉と日本の危機『中央公論』8月号, 86-93 (2022) ▼一筆『熊本日日新聞』（月1回連載 2022.3-2022.12） ▼ロシアはなぜ力で踏み込むのか：染みついた使命と解放という

名の侵略『朝日新聞』(2022.4.14) ▼「戦わなければ殺される」ウクライナと日本を隔てる戦争の記憶『毎日新聞』(2022.8.17) ㉑ 3 著書 ▼(co-edited with Yong-Chool Ha, Edward Boyle) *Geo-politics in Northeast Asia*, 264 (London: Routledge, 2022) ㉑ 5 学会報告・学術講演 ▼ *Geo-politics in Northeast Asia*, Association for Borderlands Studies Annual Convention, online (2022.4.3) ▼ War in Ukraine and beyond: Polish and Japanese Perspectives and Recommendations, OSW-SRC Special Seminar, online (2022.4.20) ▼ロシアのウクライナ侵攻後の世界を考える, 九州大学政治研究会, オンライン(2022.5.21) ▼ロシアのウクライナ侵攻後の世界と日本の危機, 第13回政治研究者フォーラム, キャンパスプラザ京都(2022.9.30) ▼Eurasia from the East: Japanese Views, SRC・Kennan Institute Seminar, Kennan Institute (2022.11.14) ▼The Transformation of Japan's Border Issues during and after the Cold War: Northern Territories, Takeshima and Senkakus, Cold War Borders and Borderlands in Europe and Northeast Asia, 1944–1991, Udine (Italy) (2023.3.10)

宇山智彦 ㉑ 1 学術論文 ▼ロシアと中央アジア(林佳世子、吉澤誠一郎責任編集『岩波講座世界歴史 17 近代アジアの動態 19世紀』197–216, 岩波書店, 2022) ▼ウクライナ侵攻は中央アジアとロシアの関係をどう変えるか: 戸惑い・危惧と変化への胎動(池内恵、宇山智彦ほか『UP plus ウクライナ戦争と世界のゆくえ』97–106, 東京大学出版会, 2022) ▼ウクライナと中央ユーラシア: 歴史的関係とロシアによる侵略戦争の衝撃『内陸アジア史研究』37: 1–15 (2022) ▼(梁晓卫译, 施越, 宇山智彦审校) 个别主义帝国: 俄国在中亚的改宗和征兵政策(庄宇, 施越主编《俄罗斯国家建构的历史进程》21–62, 北京: 商务印书馆, 2022) ▼Между эссенциализмом и многоидентичностью: Центральная Азия как часть Востока, Юга и мира, *Социологическое обозрение* 22(1): 61–71 (2023) ㉑ 2 その他業績(論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼なぜプーチン政権の危険性は軽視されてきたのか: 国際情勢分析と認知バイアス, SRC ウェブサイト(2022.4.13) <https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/PDF/20220413.pdf> ▼Unmasking Imperial History: Emotional Empire, Violent Politics of Difference, and Independence Movements in the Name of Autonomy, *Ab Imperio* 1: 121–126 (2022) ▼ロシアは何をめぐるウクライナ・米欧と対立しているのか『學士會会報』955: 16–20 (2022) ▼ロシアは非欧米諸国に支持されているのか? ウクライナは譲歩すべきなのか?, 日本国際フォーラム「ユーラシアダイナミズムと日本外交」研究会コメントリー(2022.7.20) https://www.jfir.or.jp/studygroup_article/8835/ ▼感情とイメージの地政学: ロシア・ウクライナ紛争とアフガニスタン情勢に寄せて(日本国際フォーラム編『ユーラシア・ダイナミズムと日本』111–127, 中央公論新社, 2022) ▼Similarities Between Putin's Russia and Late Imperial Japan: Backgrounds and Implications, *NYU Jordan Center Blog* (2022.12.1) <https://jordanrussiacycenter.org/news/similarities-between-putins-russia-and-late-imperial-japan-backgrounds-and-implications/> (2) 研究ノート等 ▼岡奈津子氏の研究業績: 概観と一覧『日本中央アジア学会報』18: 26–34 (2022) (5) その他 ▼(大串敦、加藤美保子、服部倫卓、前田弘毅と) 緊急座談会 この戦争はどこから来て、どこへ行くのか: 秩序の構造と変容『世界 臨時増刊 ウクライナ侵略戦争: 世界秩序の危機』957: 28–41 (2022) ▼(インタビュー) <シリーズ評論・ウクライナ侵攻>認知バイアス働く世論『北海道新聞』(2022.4.26) ▼(インタビュー) プーチンの「5月9日」: 対独戦勝記念日はロシアの国家アイデンティ

ティー『AERA』35(22): 22-23 (2022.5.16) ▼ (インタビュー) エウレカ! 北大 見過ごされた露の併合『読売新聞』北海道版 (2022.6.22) ▼ (渡邊啓貴、今井宏平、杉田弘毅、廣瀬陽子、松崎英也、オフルイズコ・ヴォロディミルと) ロシアのウクライナ侵攻を考える: 国際社会に与えた衝撃と今後の課題 シンポジウム① (日本国際フォーラム編『ユーラシア・ダイナミズムと日本』33-61, 中央公論新社, 2022) ▼ (インタビュー) Томохико Уяма: Алаш Жапониядан халықаралық деңгейде мойындауды сұраған, *Egemen Qazaqstan* (2022.9.21) ▼ (前田弘毅、服部倫卓、小森宏美と) 第33回ユーラシア研究所総合シンポジウム「ソ連解体後の30年」(報告: 中央アジア諸国の曖昧な強権体制: ソ連崩壊の残響と国家間競争の中で)『ロシア・ユーラシアの社会』1064: 2-54 (2022) ▼ (巻頭言) 中央アジア諸国とロシアの関係の行方:「通常運転」は持続可能なのか『東亜』664: 1 (2022) ▼ (隠岐さや香、久保亨、久留島典子、佐藤大介、加藤陽子、佐々木真、松原宏之、下村周太郎と) 座談会 人文知の危機 (歴史学研究会編『「人文知の危機」と歴史学: 歴史学研究会創立90周年記念』3-67, 歴史学研究会, 2022) ▼ (池田嘉郎、浜由樹子と) 座談会 プーチンのロシアは何を夢見るか?『世界』967: 77-86 (2023) ▼ 梅原報告・小森報告へのコメント (立教大学史学会大会: 世界史における「学知」の政治的ダイナミクス)『史苑』83(2): 125-130 (2023) Ⅵ 5 学会報告・学術講演 ▼ Kazakh Intellectuals' Knowledge of World Cultures and Science in the Early Twentieth Century, International Conference "Empire, Colonies and Knowledge: Intellectual Exchange in the Russian Empire and the Soviet Union," Nazarbayev University, online (2022.5.21) ▼ Обращение Райымжана Марсекова к правительству Японии о признании Алаш-Орды: анализ японских архивных материалов, Международная конференция «Әуезов, Алаш және Күншығыс елі», International Turkic Academy, オンライン (2022.5.24) ▼ ロシアのウクライナ侵攻から東アジアは何を学ぶべきか, 第28回日韓有識者政策対話, 京王プラザホテル札幌 (2022.6.16) ▼ 集団安全保障条約機構 (CSTO) とウクライナ・中央アジア情勢, 日本防衛学会第3回研究分科会「ユーラシアから見るロシアのウクライナ侵略」, オンライン (2022.6.19) ▼ Суверенитет и демократия в условиях внешних вызовов: Алашская автономия и современный Казахстан, Международная конференция «Ценностные ориентиры Нового Казахстана: вызовы современности», Казахстанский институт общественного развития, オンライン (2022.6.30) ▼ Are 21st Century Imperialism and Authoritarianism Different from Those of the 20th Century? Reflecting on Emotional Geopolitics in Eurasia, SRC 2022 Summer International Symposium "An Anarchist Turn? Imperial Rule and Resistance in the Long Twentieth Century," SRC and online (2022.7.8) ▼ 日本の中央アジア外交の方向性: アジア開発援助外交からグローバル課題への取り組みへ, キルギス共和国日本語教師会 2022 日本学・日本語教育国際研究大会, オンライン (2022.8.20) ▼ В обход Колчака: попытки алашордынцев получить помощь от Японии и международное признание, Международная конференция «105-летие Республики Алаш и истоки казахской конституции: новые источники, проблемы и перспективы исследования», НИИ «Алаш» Евразийского Национального Университета им. Л.Н. Гумилева, オンライン (2022.8.26) ▼ 中央アジアから見たウクライナ侵略戦争: 危機感と「通常運転」の間で, 日本学術会議アジア研究・対アジア関係に関する分科会公開シンポジウム「アジアから見たウクライナ戦争」, オンライン (2022.9.18) ▼ ロシアの帝国意識と「反植民地主義」の歴史的位相: 世界の階層構造の視点から, 大阪大学歴史教育研究会例会, 大阪大学

(2022.10.22) ▼ Japan's Central Asian Diplomacy: Regionalism, Universalism, and Geopolitics, Tashkent State University of Oriental Studies (2022.11.21); Urgench State University (2022.11.23)
 ▼ Post-Soviet International Relations in the Contexts of Decolonization, Regionalization, and Globalization, University of World Economy and Diplomacy, Tashkent (2022.11.25) ▼ソ連帝国の複雑な影：ロシア・ウクライナ・中央アジア，日本学術会議学術フォーラム「地球規模のリスクに立ち向かう地域研究：ウクライナ危機に多角的に迫る」，日本学術会議 (2022.12.10)
 ▼ロシアはなぜウクライナに侵攻したのか：帝国・大国論の視点から，東京経済大学 SDGs シンポジウム「ウクライナ危機・戦争：なぜ起こったのか、どう理解すべきか、何をなすべきか」，東京経済大学 (2022.12.17) ▼カザフ自治政府アラシュ・オルダの日本政府への承認・援助要請 (1919年)：旧ロシア帝国空間での民族運動の三面戦略，公開講演会「近代日本と中東・イスラーム圏」，早稲田大学高等研究所 (2023.2.18) ▼国家の生存と人々の生存：ロシア・ウクライナ戦争の世界史的意義に寄せて，生存戦略研究全体集会，SRC (2023.2.21)
 ▼ The Image of China in Central Asia and Cross-border Human Mobility, International Workshop “Shared Histories and Imperial Encounters in North-East Asia,” Amherst College (2023.3.12) ▼カスピ海の可能性：歴史的視点から，「中央アジア+日本」対話・第12回東京対話「中央アジア・コーカサスとの連結性」基調講演，霞が関プラザホール (2023.3.15) ▼非欧米世界から考えるウクライナ侵略戦争後の世界秩序：「無責任な多極」と「無反省な一極」を超えて，JFIR 公開セミナー「ウクライナ戦争2年目の行方：日本、そして国際社会の役割」，オンライン (2023.3.27)

ウルフ・ディビッド (David Wolff) ㊦ 1 学術論文 ▼ Phoney War, Phoney Peace: Sugihara's Shifting Eurasian Context (David Wolff, Takao Chizuko and Ilya Altman, eds., *Sugihara Chiune and the Soviet Union: New Documents, New Perspectives* [Slavic Eurasian Studies No. 35], 23–32, SRC, 2022) ㊦ 3 著書 ▼ (co-edited with Takao Chizuko and Ilya Altman) *Sugihara Chiune and the Soviet Union: New Documents, New Perspectives* [Slavic Eurasian Studies No. 35], 232 (SRC and Tsentr-Fond Kholokost Moskva, 2022) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Book Talk “Sugihara Chiune and the Soviet Union: New Documents, New Perspectives,” Harriman Institute at Columbia University (2022.9.14) <https://www.youtube.com/watch?v=MA6FBUNpc8o> ▼ Russia's Great War and Revolution: Final Publications, 54th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), Chicago (2022.11.11) ▼ (with Akihiro Iwashita, Shinichiro Tabata and Norihiro Naganawa) *Eurasia from the East: Japanese Views*, Kennan Institute, Woodrow Wilson Center for International Scholars, Washington, DC (2022.11.14) <https://www.wilsoncenter.org/event/eurasia-east-japanese-views> ▼ (with Shinichiro Tabata and Norihiro Naganawa) *Eurasia from the East: Japanese Views*, Davis Center Comparative Politics Seminar, Davis Center at Harvard University (2022.11.17) ▼ (with Yasuhiro Izumikawa) *Placing War in Ukraine: Comparisons and Vantage Points*, Nichibun Evening Seminar, Kyoto (2023.2.2)

金野雄五 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ロシアへの経済制裁が劇的な効果を示していないワケ『Wedge ONLINE』(2022.6.3) <https://wedge.ismedia.jp/articles/-/26840> ▼戦争長期化で歪み続けるロシア経済：もはや修復不能『Wedge ONLINE』

(2022.9.26) <https://wedge.ismedia.jp/articles/-/28026>

仙石学 ① 1 学術論文 ▼中東欧諸国における子育て支援策の変容：世界金融危機以後の状況から『ロシア・東欧研究』50: 59-71 (2022) ▼スロバキアの年金制度『年金と経済(2020年の改訂版)』41(2): 196-199 (2022) ② 2 その他業績(論文形式)(1) 総説・解説・評論等 ▼ポーランド(宇佐見耕一ほか編『世界の社会福祉年鑑2022』207-225, 旬報社, 2022) ▼第30章 ポーランド; 第57章 ポーランドの「東方政策」の変容：EUとの協働から「大西洋指向」へ(広瀬佳一『NATOを知るための71章』158-161, 279-282, 明石書店, 2023) ③ 5 学会報告・学術講演 ▼中東欧諸国の政党政治とウクライナ, 日本国際政治学会2022年度研究大会, 仙台国際センター(2022.10.29)

巽由樹子 ② 2 その他業績(論文形式)(4) 翻訳 ▼ヴラジーミル・スターソフ「ロシアの民衆的装飾(1872年)抄訳」『スラヴ文化研究』20: 104-119 (2023) ③ 5 学会報告・学術講演 ▼Press in the Empire: The entangled history of publishing in Russian in the late nineteenth century, The 2022 conference of the Society for the History of Authorship, Reading and Publishing, Amsterdam and online (2022.7.15) ▼ロシアのウクライナ侵攻と歴史観, 国際理解講座, 三鷹国際交流協会(2023.2.18)

田畑伸一郎 ① 1 学術論文 ▼Economic Integration in Northeast Asia from the 1990s (Akihiro Iwashita, Yong-Chool Ha and Edward Boyle, eds., *Geo-Politics in Northeast Asia*, 171-183, London: Routledge, 2022) ▼ロシアの経済・財政状況：2021年の回復と迫る暗雲『ロシアNIS調査月報』67(5): 2-25 (2022) ▼ロシアへの経済制裁とその影響：短期的変化と長期的展望『ロシアのウクライナ侵攻』(NIRA総合研究開発機構研究報告書)(2022.7.8) <https://www.nira.or.jp/paper/research-report/2022/112207.html> ▼経済制裁とロシア『国際問題』709: 50-61 (2022) ③ 5 学会報告・学術講演 ▼ウクライナ侵攻とロシア経済, 兵庫県立大学政策科学研究所シンポジウム「ウクライナ侵攻後の世界経済：ロシア・中国・インド」, 兵庫県民会館(2022.6.6) ▼世界的な脱炭素・脱ロシアのロシア経済発展への影響, 比較経済体制学会全国大会, 函館大学(2022.6.12) ▼The Influence of Economic Sanctions on the Russian Economy, 54th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), Chicago (2022.11.12) ▼(with Diana Mikhailova) Economic Development in the Arctic Regions in Russia: before and after February 2022, Seventh International Symposium on Arctic Research (ISAR-7), National Institute of Polar Research (2023.3.8)

兎内勇津流 ① 1 学術論文 ▼戦前のクリル諸島とサハリン島(宮脇昇、樋口恵佳、浦部浩之編著『国境の時代』(ASシリーズ18)104-131, 大学教育出版, 2022) ▼1930年代ソ連極東部の国境管理体制と強制移住(日ソ戦争史研究会『日ソ戦争史の研究』227-249, 勉誠出版, 2023) ▼(原暉之と)日本帝国の膨張と縮小のモデルとしての北サハリン占領(原暉之、兎内勇津流、竹野学、池田裕子編著『日本帝国の膨張と縮小：シベリア出兵とサハリン・樺太』(スラブ・ユーラシア叢書16)1-37, 北海道大学出版会, 2023) ▼尼港事件はどのようにして起こったか：三月武力衝突とその前後(同書59-85) ② 2 その他業績(論

文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼パネル B「シベリア出兵を見直す：人々の対応を通じて」『ロシア史研究』108: 76-79 (2022) ▼シベリア出兵の転換点としての1920年『近現代東北アジア地域史研究会 Newsletter』34: 68-69 (2022) (2) 研究ノート等 ▼(及川琢英と)立花小一郎回顧余録(五)大正9年10月-10年3月(翻刻)『近現代東北アジア地域史研究会 Newsletter』34: 1-68 (2022) (4) 翻訳 ▼エレナ・チェルノツカヤ「中国人の極東からの追放と強制移住, 1938年」『環オホーツクの環境と歴史』5: 41-52 (2022) ▼(伊丹明彦と共訳)クリフォード・フォウスト「ロシア鉄道奉仕団：ジョン・フランク・スチーヴンスと極東・満洲におけるアメリカの変化する干渉」『環オホーツクの環境と歴史』5: 53-70 (2022) ▼チャールズ・バーネット「アメリカ大使館付武官バーネット陸軍中佐のサハリン出張報告書」『環オホーツクの環境と歴史』5: 71-79 (2022) ▼(白木沢旭兎と共訳)ジョナサン・ブル「戦後初期の日本における満洲引揚者像と樺太住民の引揚」(日ソ戦争史研究会『日ソ戦争史の研究』415-439, 勉誠出版, 2023) ▼(醍醐龍馬と共訳)ヴァレリー・シュービン「1867年から1877年にかけてのクリル諸島」『小樽商科大学人文研究』145: 19-36 (2023) ①3著書 ▼(環オホーツク環境と歴史編集委員会として編著)『環オホーツクの環境と歴史』5: 80 (サッポロ堂, 2022) ▼(原暉之、竹野学、池田裕子と共編著)『日本帝国の膨張と縮小：シベリア出兵とサハリン・樺太』(スラブ・ユーラシア叢書16)438(北海道大学出版会, 2023) ①5学会報告・学術講演 ▼1921年5月ウラジオストク政変試論, 第11回シベリア出兵史研究会, 帝京大学(2022.7.31) ▼臨時政府期のロシア正教会を考える, プラトンとロシア研究会, 早稲田大学(2023.3.7)

中井遼 ①1学術論文 ▼Partisan difference in social desirability bias on anti-immigrant sentiments: Covert and overt expression among French voters, *International Migration*, early view: 1-14 (2023) [doi: 10.1111/imig.13133] ▼(with Akira Igarashi, Yoshikuni Ono) Citizens' Attitudes toward the Protection of Immigrants' Human Rights: Evidence from a Survey Experiment in the Netherlands, *WINPEC Working Paper Series*, E2216: 1-25 (2023) ▼The democratic backsliding paradigm in enlarged European Union countries: In-depth analysis of V-Dem indicators, *Frontiers in Political Science*, 4: 1-11 (2023) [doi: 10.3389/fpos.2022.966472] ▼Information Security and Russian Influence Operations in the Baltic States: Media, Memory, and Minority, *ROLES Review*, 2: 5-20 (2022) ▼(石田陸人と)天候が投票率に与える影響の再検討：日本の多様な天候データに着目して『選挙研究』38(1): 105-112 (2022) ▼バルト三国の情報安全保障とロシアの影響力工作：世論・メディア・ロシア語系住民・歴史認識問題『ROLES REPORT』19: 1-16 (2022) ①2その他業績(論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼2021年学会展望：政治史・比較政治・地域研究(ロシア・東欧・他)『年報政治学』2022-II号: 222-225 (2022) ▼ウクライナ戦争と欧州政治：選挙結果とインフレの影響は「無関係」？『Nippon.com』(2022.11.29) (Are Ukraine and Inflation Really Impacting European Elections?, *Nippon.com* (2022.12.19)) ▼バルト三国ラトビアで「ロシアは悪くない」と考えている人々の特徴『フォーサイト』(2022.11.14) (2) 研究ノート等 ▼Expanding and Evolving Baltic Studies in Japan: Content Analysis of Bibliographical Databases, *Journal of law and political science / Kitakyushuu Shiritsu Daigaku housei ronshuu*, 50(1/2): 137-153 (2022) (5) その他 ▼リトアニア 脱ロシア急進『毎日新聞』(2022.8.20 夕刊) ①5学会報告・学術講演 ▼

Controversies in the process of introducing i-voting in Estonia: What issues were discussed and which ideas were rejected (or accepted)?, Workshop on Democratic Innovation: Electronic Voting and Direct Democracy, Kobe University (2022.10.13) ▼ Survey experiment on patronage politics in Lithuania: In consideration with minority politics, The 28th Biennial AABS Conference, Seattle (2022.5.27) ▼ 少数民族政党とパトロネージ政治に関するサーベイ実験：並立制リトアニアにおけるポーランド系住民の政治動員, 日本選挙学会 2022 年度大会, 金沢 (2022.5.8)

長縄宣博 ¶ 1 学術論文 ▼ *Officious Aliens: Tatars' Involvement in the Central Asian Revolution, 1919–1921*, *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History* 24(1): 63–92, 2023 ¶ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ *Uninvited Guests, or Tatars in Revolutionary Turkestan*, SICE Blog, Austrian Academy of Sciences <https://www.oeaw.ac.at/sice/sice-blog/uninvited-guests-or-tatars-in-revolutionary-turkestan> ¶ 5 学会報告・学術講演 ▼ ロシア内地のムスリムが見たオスマン帝国, 日本イスラム協会公開講演会「トルコ・ロシア関係の歴史—帝国・文化・国際関係」, オンライン (2022.12.4) ▼ 越境のすすめ：ロシアのムスリム地域からの提案, 中東☆イスラーム教育セミナー, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (2022.9.15) ▼ イスラーム教徒と帝国の戦争, 2022 年度 SRC 公開講座「溶解する帝国—ロシア帝国崩壊を境界地域から考える」, SRC 及びオンライン (2022.5.16) ▼ *Vicious Alliance? Russia and Saudi Arabia in a Shifting World*, Davis Center Comparative Politics Seminar, Harvard University (2022.11.17); Kennan Institute, Woodrow Wilson Center for International Scholars, Washington, DC (2022.11.14) ▼ *How Revolutionary Russia Began to Shape the Middle East: A Biographical Vision*, Iranian Studies at the MacMillan Center, Yale University (2022.11.16) ▼ *Emancipation Betrayed? Shamil Usmanov's Account of the Battles with the Orenburg Cossacks*, the 54th ASEES Annual Convention, Chicago (2022.11.12) ▼ *A Crucible of Muslim Radicalism: Mobile Youth and Russia's Multinational Society on the Volga-Caspian Traffic*, Workshop “Russia's Muslims and Global Radicalism,” Austrian Academy of Sciences (2022.9.27) ▼ *The Volga-Caspian Traffic of Muslim Radicals at the Beginning of the Twentieth Century*, SRC Summer Symposium “An Anarchist Turn? Imperial Rule and Resistance in the Long Twentieth Century,” online (2022.7.7) ▼ *Russia's Empire and Nationalism from the Mid-Nineteenth Century to 1991 (in Russian)*, Ch. Ch. Valikhanov Institute for History and Ethnology (2022.5.23) ▼ *Muslim Youth, Russia's Multinational Society, and the Circulation of Democratic Ideals*, International Conference “Empire, Colonies, and Knowledge: Intellectual Exchange in the Russian Empire and the Soviet Union,” Nazarbayev University (2022.5.22)

野町素己 ¶ 1 学術論文 ▼ *Afanasij Matveevič Seliščev's unpublished manuscript on the South Slavic languages*, *Slavistika*, 25(2): 115–131 (2022) ▼ *On a particular usage of the locative and accusative cases in Burgenland Croatian*, *Južnoslovenski filolog*, LXXVX (1): 383–408 (2022) ¶ 5 学会報告・学術講演 ▼ *The Early Nikita I. Tolstoj as a Macedonist*, 11th Macedonian-North American Conference on Macedonian Studies, Arizona State University (2022.11.6) ▼ *Soviet Scholars' Unrealized Contributions to Macedonian Linguistics (1944–1950)*, *Seriya lingvističkih predavanja ČOVJEK-JEZIK-SVIJET*, University of Sarajevo (2022.12.23)

服部倫卓 ① 1 学術論文 ▼ 2 度のウクライナ危機における EU と NATO の要因（一般財団法人国際経済連携推進センター編『ウクライナ侵攻と世界：岐路に立つ国際秩序』124-134, 産経新聞出版, 2023） ▼ ロシアとウクライナの 10 年貿易戦争『ロシア・東欧研究』51: 21-40 (2023) ② 2 その他業績（論文形式）(1) 総説・解説・評論等 ▼ ウクライナとベラルーシ：運命を異にした兄弟国『ロシア・ユーラシアの社会』1064: 9-10 (2022) ▼ ロシアのウクライナ侵攻とプーチン体制の行方『ロシア NIS 調査月報』12: 82-93 (2022) ▼ ウクライナ戦争の行方：ロシア経済に機能不全リスクも一切顧みないプーチン大統領『週刊エコノミスト』2022 年 12 月 27 日・2023 年 1 月 3 日合併号：30-31 ▼ 対ロ経済制裁とロシア経済の今後（『現代用語の基礎知識 2023』16-17, 自由国民社, 2022） ▼ 2023 年ロシア経済を待ち受ける残酷物語『Wedge ONLINE』(2023.1.4) ▼ 肥料輸出で制裁に楔を打ち込みたいロシア『ロシア NIS 調査月報』2: 26-33 (2023) ▼ 煮え切らない中国、焦るプーチン：露中経済関係の実情『Wedge ONLINE』(2023.2.6) ▼ 経済制裁してもロシア人の生活に影響が少ないのはなぜ？ 穀物生産国に見えて実は不安定なロシアの食料安全保障『Wedge ONLINE』(2023.3.13) ▼ ウクライナ危機下のロシア経済『ユーラシア研究』67: 15-21 (2023) (5) その他 ▼ (鶴岡路人との対談)「平和な戦後」は訪れるのか？ 戦争の行方を読み解く『Wedge』3: 62-65 (2023) ▼ (インタビュー) <シリーズ評論・ウクライナ侵攻 1 年> 日ロ地域間、つながり維持を：経済制裁では体制倒れぬ『北海道新聞』(2023.2.13) ③ 5 学会報告・学術講演 ▼ ロシアとウクライナの 10 年貿易戦争, ロシア・東欧学会 2022 年研究大会, 新潟大学 (2022.11.5) ▼ 制裁下のロシアの貿易パフォーマンス, 公益財団法人環日本海経済研究所主催「2022 年度北東アジア経済発展国際会議 (NICE) イン新潟」(2022.12.1) ▼ ロシア経済はどこまで持ち堪えるか, 一般財団法人国際経済連携推進センター主催国際情勢ウェビナー「ロシア経済の展望と脱ロシアの行方」(2022.12.20) ▼ Analyzing Russia's Foreign Trade Performance with No Russian Official Statistics Available, SRC International Symposium "Survival Strategies of Ukraine and Russia: A Year On from the Outbreak of War," SRC and online (2023.2.22)

ベクトウルスノフ・ミルラン (Mirlan Bektursunov) ① 1 学術論文 ▼ "Two Parts – One Whole?" The Kazakh-Kyrgyz Relations in the Making of Soviet Kyrgyzstan, *Central Asian Survey* 42(1): 109-126 (2023) ▼ Февральская революция и кыргызская политическая элита: известные и неизвестные страницы истории, *Вестник КРСУ* 22(6): 3-11 (2022)

村上智見 ① 1 学術論文 ▼ チャンドマニ・ハル・オール遺跡出土繊維の調査『金大考古』82: 72-80 (2023) ② 2 その他業績（論文形式）(5) その他（予稿集） ▼ (ベグマトフ・アリシエル、サンディボエフ・アリシエル、フジャモフ・サナット、マハマディエフ・ガイラット、アルジエフ・コムルジョン、宇野隆夫、寺村裕史と) ソグディアナの都市を探る：ウズベキスタン共和国クルゴン・テパ遺跡発掘調査（2022 年度）『第 30 回西アジア遺跡調査報告会報告集 令和 4 年度考古学が語る古代オリエント』94-97 (2023) ▼ (宇野隆夫、寺村裕史、ベグマトフ・アリシエル、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディー、サンディボエフ・アリシエルと共著) ソグド王離宮を掘る：ウズベキスタン共和

国カフィル・カラ遺跡（シャフリスタン地区）2022年度発掘調査『第30回西アジア遺跡調査報告会報告集 令和4年度考古学が語る古代オリエント』98-102 (2023) ▼(山崎幸治, 田本はる菜と共著), 台湾原住民族海報展在北海道大學總合博物館, 第十五回台日原住民族研究論壇, 156-167 (2022) 【5 学会報告・学術講演 ▼ソグディアナの都市を探る：ウズベキスタン共和国クルゴン・テパ遺跡発掘調査（2022年度）, 第30回西アジア遺跡調査報告会 令和4年度考古学が語る古代オリエント, 池袋サンシャインシティ (2023.3.26)

村上勇介 【1 学術論文 ▼特集 新しい左派政権は変化をもたらすか？ 総論；混迷から自壊へ、そして再生は可能か？：ペルー カスティジョ政権『ラテンアメリカ時報』65(4): 2-5, 13-16 (2022) ▼盛り返すラテンアメリカ左派政権：ポスト新自由主義の多様な動き『外交』78: 94-99 (2023) 【5 学会報告・学術講演 ▼国際人権レジームと先住民：ペルーの事例, 日本ラテンアメリカ学会第43回定期大会シンポジウム「ラテンアメリカ諸国における国際人権レジームの適用と課題」, 同志社大学 (2022.6.4) ▼ペルー左派政権の行方：カスティジョ政権の10ヶ月, 京都大学アジア環太平洋研究セミナー, オンライン (2022.6.25) ▼ラテンアメリカにおけるウティ・ポシデティスの成立と適用, SRC・京都大学東南アジア地域研究研究所・東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所戦略的パートナーシップ協定記念セミナー「ロシアのウクライナ侵攻『ポスト冷戦』は終わったのか？ラテンアメリカ、中東、旧ソ連の経験から」, オンライン (2022.10.07) ▼再びの左傾化：2020年代のラテンアメリカ政治総論；ペルー Pedro Castillo 政権, 2022年ラテンアメリカ政経学会全国大会ラテンアメリカ協会共同企画セッション「再びの左傾化—2020年代のラテンアメリカ政治—」, 神戸大学 (2022.11.12) ▼長期（30-40年）の観点からみたラテンアメリカ政治のいま, 京都外国語大学ラテンアメリカ研究所主催討論会「ラテンアメリカ政治のいま、そしてこれから」, オンライン (2022.12.18) ▼ラテンアメリカの再左傾化：現状と背景, 第43回SRC公開講演会, オンライン (2022.12.23) ▼カスティジョ政権の自壊と今後の見とおし, 京都大学アジア環太平洋研究セミナー, オンライン (2023.1.28)

みせらねあ

スラブ・ユーラシア叢書第16巻の刊行

この3月、「スラブ・ユーラシア叢書」シリーズの第16巻として、原暉之・兎内勇津流・竹野学・池田裕子編著『日本帝国の膨張と縮小：シベリア出兵とサハリン・樺太』が北海道大学出版会より刊行されました。

同シリーズ第10巻の原暉之編著『日露戦争とサハリン島』（2011年刊）は、日露戦争の終盤で戦場となったサハリンが、ポーツマス条約によって南半分を日本に割譲され、樺太として統治が始まった前後のを取り上げました。本論集はその続編に当たるものです。

シベリア出兵の中盤に当たる1920年初めにシベリアのコルチャーク政権が倒れ、革命派勢力が極東各州に台頭すると、日本は同年春のニコラエフスク（尼港）事件をきっかけに、約5年間北サハリンを占領しましたが、1925年に日ソ基本条約を結んでソ連を国家承認す

ると同時に、ここから撤兵しました。

シベリア出兵についての研究がまだまだ不足しているなかで、本論集では、最新の史料と研究に基づいて尼港事件の歴史的背景やシベリア出兵の中での位置づけを確認し、さらに占領の実態や資源開発の問題、占領とその終了に伴った人の移動、利権供与と撤兵・国交の樹立がセットで行われるまでの外交交渉の推移などを、各分野の第一線の専門家に執筆いただいて多面的に掘り下げることができました。こうしてまとめられた本書は、北サハリン占領（1920-1925）についての最も包括的な研究となったと自負しております。

第一次世界大戦（1914-1918）から 1920 年代前半にかけての大正期、日本は山東半島や南洋諸島への進出をはかり、また、対華 21 箇条要求（1915 年）などで満蒙をはじめとする権益の延長・強化をはかりました。その後シベリア出兵（1918-1922 年）が開始されますが、第一次世界大戦が終わると、アメリカのウィルソン大統領の提唱により国際連盟が発足し、ソ連が成立するなど、国際関係のパラダイムが変化していきます。

北サハリンの占領と撤収は、こうした国際環境の変化に対する日本の対応を示すひとつの事例であり、極東地域史の一環であるとともに、資源と地政学をめぐる国際問題、さらには大正期日本の政治外交史を考える上での新しい材料となることを期待しています。ただし、約 450 頁という分量に加えて昨今の経済状況から、税込み定価 7920 円と、叢書中最も高価になってしまいました。

本書の目次は以下の通りです。

序章 日本帝国膨張と縮小のモデルとしての北サハリン占領 / 原暉之・兎内勇津流

第 1 部：サハリン州の再構成から尼港事件へ

第 1 章 V 字回復の先を模索するニコラエフスク：尼港事件の社会的背景 / 原暉之

第 2 章 尼港事件はどのようにして起こったのか：三月武力衝突とその前後 / 兎内勇津流

第 3 章 革命・内戦期の北サハリンとイヴァン・スタヘーエフ商会の活動 / エドワルド・バル
ルィシエフ

第 4 章 革命・内戦・干渉戦期のサハリン州の漁業 / 神長英輔

第 5 章 尼港事件と日本の政治・社会 / 井竿富雄

第 2 部：保障占領下北サハリンの政治・経済・社会

第 6 章 保障占領のポリティクス：帝国日本の統治とサハ
リン島民 / 天野尚樹

第 7 章 サハリン軍事占領と司法：「裁判の公平」「司法権
の独立」をめぐる / 井澗裕

第 8 章 北サハリンに進出した日本人商工業者の活動と引
揚げ / 竹野学

第 9 章 北サハリン占領と島内・外の交通体系：サハリン
島の一島支配と輸送 / 三木理史

第 10 章 北サハリンと〈樺太〉農林資源問題：〈北樺太〉
農林資源調査と 1930 年代の木材輸入を中心に / 中山大將

第 3 部：日ソ基本条約とその後のサハリン・樺太

第 11 章 日ソ国交正常化交渉とサハリン問題：北京会議



と日ソ基本条約の締結（1924-25年）/ ヤロスラヴ・シュラトフ

第12章 1920年代のサハリン先住民族の移動と国境の関係性：樺太庁による「オタスの杜」集住化 / 田村将人

第13章 北サハリンから日本へ避難・移住したロシア人：1924-1925年 / 倉田有佳

第14章 1925年の樺太における「国民統合」：皇太子の行啓を中心に / 池田裕子

終章 共通利益による体制融和構想の破綻：ソ連の計画経済と北サハリン / 浅野豊美

[兔内]

センターの役割分担

2023年度のセンター教員の役割分担は以下の通りです。[野町・編集部]

センター長	野町
副センター長	仙石・ウルフ
拠点運営委員会委員	岩下・宇山・仙石・長縄・野町
【学内委員会等】	
教育研究評議会、部局長等連絡会議、部局長等意見交換会	野町
教務委員会	野町
創成研究機構運営委員会（新設）	野町
未来戦略本部財務運営検討部会（新設）	野町
図書館委員会	青島
国際担当教員	ウルフ
RJE3 学内運営委員会およびカリキュラム検討専門委員会	安達・服部
低温科学研究所拠点運営委員会	野町
北極域研究センター運営委員会	服部
男女共同参画委員会	岩下
社会科学実験研究センター運営委員会	服部
サステナブルキャンパス推進員	野町
ハラスメント予防推進員	岩下
広報担当者	服部
共同利用・共同研究拠点アライアンス運営委員	長縄
アイヌ・先住民研究センター運営委員	青島
【学外委員会等】	
国立大学附置研究所・センター会議	野町
国立大学共同利用・共同研究拠点協議会	野町
JCREES 事務局	野町・諫早
地域研究コンソーシアム理事	野町
地域研究コンソーシアム運営委員	仙石・諫早
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点運営委員	宇山

ICCEES 情報	青島
【センター内部の分担】	
大学院講座主任	仙石
教務委員	岩下
入試委員	宇山
総合特別演習担当	(前期) 宇山 (後期) 服部
全学教育科目責任者	岩下
全学教育科目総合講義	長縄・村上・井上・諫早
文学研究院授業	青島
国際科目	ウルフ
サマースクール	服部
将来構想	野町・宇山・仙石・長縄・岩下
点検評価	長縄・宇山・岩下・田宮
夏期シンポジウム (実施方法など検討)	諫早・長縄・非常勤研究員*
冬期シンポジウム	岩下・ウルフ・非常勤研究員*
図書	兔内・岩下
情報	宇山
広報	服部・田宮
予算	服部
共同利用・共同研究公募	長縄
客員教員	服部
外国人研究員プログラム	安達・ウルフ・田宮
リボヴェツキー	安達
グリーンバーグ	野町
プロヒー	ウルフ・青島
リャプチュク	宇山
ツェデンタンバ	ウルフ
イリシエフ	長縄
非常勤研究員	仙石
中村・鈴川基金	仙石
百瀬基金	岩下
公開講座	服部・田宮
公開講演会	長縄・村上 (生存戦略研究)・諫早 (生存戦略研究以外)・非常勤研究員
専任研究員セミナー (助教・非常勤研究員セミナーを含む)	安達
その他研究会・講演会	安達・非常勤研究員
クロスアポイントメント教員 (人事対応)	岩下
共共拠点三研究所・センター交流 (東南アジア研・AA 研)	岩下・長縄
生存戦略研究ユニット	長縄・岩下

研究所一般公開	村上（・諫早）
博物館展示	岩下
NIHU 東ユーラシア（NIHU セミナー、HP、オンライン報告書）	岩下
UBRJ（HP、『境界研究』）	岩下
その他諸行事企画	野町・井上・非常勤研究員
雑誌編集委員会	安達・宇山・ウルフ・長縄・青島
<i>Acta Slavica Iaponica</i>	長縄・ウルフ・田宮
『スラヴ研究』	青島・田宮
スラブ・ユーラシア叢書、SES、研究報告集	安達
ニューズレター和文（メルマガ・HP コンテンツ）	宇山・田宮（・野町）・非常勤研究員
ニューズレター欧文（メルマガ・HP コンテンツ）	ウルフ・田宮（・野町）・非常勤研究員

*非常勤研究員 2 名で担当するなかでの代表者を示す。2 名の名前がある場合は輪番制。

専任研究員消息

ウルフ・ディビット研究員は、2/18～3/24の間、資料収集、ワークショップ「Cold War Borderlands in Europe and Northeast Asia 1944–1991」（3/9～3/11）出席・研究報告のため、ドイツ（ミュンヘン）・イタリア（ウーディネ）に出張。

岩下明裕研究員は、3/6～3/18の間、資料収集、国際ワークショップ（3/9～3/11）出席・研究報告、研究打合せのため、イタリア（ヴィネツィア/ウーディネ/トリエステ）・スロベニア（コペル/リュブリャナ）・トルコ（イスタンブール）に出張。

長縄宣博研究員は、3/6～3/19の間、資料調査のため、イギリス（ロンドン/オクスフォード）に出張。

宇山智彦研究員は、3/10～3/14の間、ワークショップ「Shared Histories and Imperial Encounters in North-East Asia」（3/11～12）出席・研究報告のため、アメリカ（アマーフト）に出張。

安達大輔研究員は、2/28～3/9の間、「ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマ的想像力の総合的研究」関連カンファレンス（3/2～3/3）出席・研究報告、研究打合せ、研究調査のため、イタリア（ヴィネツィア/ヴェローナ）に出張。

青島陽子研究員は、3/28～3/31の間、ICCEES Executive Committee（3/31）出席、研究打合せのためイギリス（セント・アンドルーズ/グラスゴー）に出張。

目 次

研究の最前線	1
2023年度夏期国際シンポジウム《崩壊の局面：アフロ・ユーラシアから「14世紀の危機」を思考する》開催予告／生存戦略研究全体集会と国際シンポジウム《ウクライナとロシアの生存戦略》開催される／野町素己研究員が第25回ケネス・E・ネイラー記念講演講師に選出／2023年JCREESスラブ・ユーラシア研究サマースクール開催予告／公募研究プロジェクト型セミナー「残留の比較史研究：シベリア・サハリンから台湾・東南アジアまで」の開催／共同研究員／専任研究員・助教・非常勤研究員セミナー／研究会活動	
人事の動き	17
田畑伸一郎教授の退職と最終講義／後藤助教の退職／大西富士夫准教授の兼務教員としての着任／URAの着任／研究員・事務職員の異動／2023年度の客員教授・准教授	
2022年夏、札幌にて	20
by アリッサ・デブラシオ	
学界短信	22
学会カレンダー	
大学院だより	23
図書室だより	24
オンラインデータベースの追加導入	
編集室だより	24
Slavic Eurasian Studies No. 35, <i>Sugihara Chiune and the Soviet Union: New Documents, New Perspectives</i> , ed. David Wolff, Takao Chizuko and Ilya Altman の刊行／ <i>Acta Slavica Iaponica</i> / 『スラヴ研究』	
会議	26
センター協議員会	
誰が何をどこで	26
みせらねあ	36
スラブ・ユーラシア叢書第16巻の刊行／センターの役割分担／専任研究員消息	

2023年6月6日発行

編集	田宮彩也香、宇山智彦
発行者	野町素己
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-2388、706-3156 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
